

煩悶青年からその「良師益友」へ——『學生雜誌』における楊賢江——

森 川 裕 貫

はじめに

一九〇三年五月、第一高等學校の學生であつた藤村操は、「巖頭之感」と題する遺書を刻んだのち、華嚴瀧に身を投げ自ら命を絶つた。この出来事は大きな注目を集め、精神的苦悶にとらわれた若き男性、すなわち煩悶青年が當時の日本社會に存在していることを廣く知らしめた。藤村の自殺を一つのきっかけとして、多くの知識人が煩悶について議論し、藤村と同年代の青年は、より自覺的に自らの抱える煩悶に向き合うようになっていく。煩悶はいわば一つのブームとなり、日本社會を席卷したのである。

大きな影響力を有した煩悶そして煩悶青年については、後世の研究者も多大な關心を注いできた。その原因としては、傳統的な家族道德の崩壊、日露戰爭後に蔓延した目標喪失の状態といった内的な價值觀の變化や、明治後期に藤村のような高學歷青年の就職市場が狭まり明治前期のような急速な立身出世が困難になつたという外的な制度の變化が挙げられている。<sup>①</sup>また、煩悶青年が、煩悶にいかに対応したのかという點についても研究が進んでいる。その知見によると、高等學

校學生を中心に教養主義が煩悶に立ち向かうよりどころとして流行する一方<sup>②</sup>、上級の學校への進學がかなわず煩悶していた青年たちのなかには、上京苦學の道を選択する者、それがかなわぬ者は講義録という獨學用の媒體を利用しその野心を埋め合わせようとしていたことが明らかにされている。<sup>③</sup> 明治末年に登場した日本の煩悶青年については、豊かな研究成果が積み上げられているといつてよいだろう。

近現代の日本と中國に、多くの共通點や連關が存在することは、周知のとおりであるが、近現代の中國にも、實は煩悶青年が存在していた。ただし、その存在が認識されるようになった時期については、日本との間にずれがある。特定するのは簡單ではないが、きっかけとなった出來事として、一九一九年一月、北京大學の學生であつた林德揚が、北京西城萬牲園の池に身を投げ自殺した事件が擧げられよう。林の自殺について、新聞や雑誌で論評する記事が多數現れ、この事件を契機に、青年の煩悶が社會的問題として注目されるようになった。<sup>④</sup> こうした問題に苦しむ青年を、煩悶青年として捉え議論していくことが定着していったのである。

だが、近現代中國の煩悶青年に關する研究は、十分に進んでいるとはいえない。<sup>⑤</sup> 日本の煩悶青年研究の知見は、内的價值觀と外的制度の變化およびそれらの變化に對する反應という諸側面から煩悶青年問題を考える必要を示唆するが、中國についてはいずれの側面でも研究が不足しているのである。とりわけ、外的制度の變化については、日本と比較して信頼に足るデータが不足しており、實行は容易ではない。そこで本稿では、内的價值觀の變化とそれに對する反應という二つの側面から、近現代中國の煩悶青年問題を考えたい。

内的價值觀の變化という側面から見て、この時期に中國で煩悶青年が登場した一つの重要な要因として、新しい價值觀と古い價值觀の相剋が擧げられる。この點については、當時の青年の次の説明が參考になる。「今の中國には多くの青年がいるが、一つの注意すべき状態にある。その状態とは、舊來の學術、思想、信條に對してはすでに信頼を失っているが、

新しい學術、思想、信條をまだ得ることができず、心のなかに一種の空虚が突然生じているというものである。思想にはまだ頼れるものがなく、行爲や舉措には標準がない。頭を搔いてためらい、どのようにするのがよいかわからない。これが廣く見られる、いわゆる「青年の煩悶」である<sup>6</sup>。新文化運動の進展に伴い、青年は古いと考えられた價值をもはや信じてことができず、捨て去ってしまったている。その一方で、新文化運動は搖らぎのない安定した價值を提示しているわけではない。つまり、目の前の價值、從來の價值が誤りであることは指摘していても、それに代わる優れた價值を示してはいない。青年は自ら新しい價值を求めなければならないが、それは容易には見當たらず、彷徨を餘儀なくされていたのである。

とはいえ、具體的に青年が何にどのように煩悶したのか、煩悶解消のためにいかなる努力をしたのか、その努力はいかなる歸結を招來したのか、これらの基本的側面は十分には掘り起こされていない。掘り起こしのためには、煩悶青年の具體的姿に焦點を當てるのが有益であろう。そこで本稿は、楊賢江という人物および彼により主導された時期の『學生雜誌』を素材として取り上げる。

楊賢江は一八九五年、浙江省餘姚縣に生まれた。浙江省立第一師範學校を経て、『少年世界』や『學生雜誌』といった雑誌の運営に參與するかたわら、一九二二年には中國共產黨に入黨し、上海を據點に革命活動に従事した。一九二七年四月の上海クーデター以降は、中國國民黨に追われる立場となり、一時日本への亡命を強いられるなど危険と隣り合わせの生活をおくったようであるが、その一方で教育関連の著述や翻譯に没頭し、複数の書籍を刊行している。一九三一年、腎結核が発覺し、長崎に渡航して治療を試みたが、そのかいなく同地で短い生涯を閉じている。

中國革命に従事しつつも若くして病死した楊賢江は、今日の日本に住むわれわれにとっては、あまりなじみがあるとはいえない人物であろう。また今日の中國でも、それほど注目される存在ではないようである。「中國の新民主主義革命史

上、特に現代教育史と青年運動史において、光り輝く地位を占めている」と稱されることもあるとはいえ、後述のように研究はそれほど多くない。しかし、かりに一九二〇年代の中國、特にある程度の規模の都市に赴き、そこを行き交う學生、具體的には中等學校の學生に楊賢江の名を尋ねることができるとすれば、おそらくはほとんどの人が、その名に聞き覚えがあつたのではないかと想像される。

それは、一九二〇年代の數年間、彼が編集を擔い多くの文章を發表した『學生雜誌』による。一九二〇年代の同誌の發行部數は五千部から七千部とされ、商務印書館の雜誌としては、『東方雜誌』の一萬五千部、『教育雜誌』の一萬部に次いで多い。<sup>(8)</sup>當時の中等學校の學生數は、一五萬人から二〇萬人の間にあつたとされているので、三〇人程度に一人が讀んでいたことになる。<sup>(9)</sup>ただし、當時の習慣として、一冊の雜誌は複數人に回覽されることが通常であつたから、實際の讀者數は發行部數をはるかに上回ると考えてよく、學生や青年を對象とした雜誌としては、中國近現代を代表するものの一つといつても過言ではなからう。

このように重要な位置を占める『學生雜誌』、そしてその中心に位置した楊賢江が、煩悶青年問題を扱うのに好適である理由は、第一に楊賢江自身が煩悶青年であつたこと、そしてその子細を彼の旺盛な言論活動と詳細な日記から讀み取ることができるとためである。第二に楊賢江の主導する『學生雜誌』が、煩悶青年に關する言論のみならず、煩悶青年からの投書とそれに對する應答を毎號にわたり掲載しており、數多くの煩悶青年の生の聲に觸れられることによる。以上の點から、煩悶青年の實態解明にとり、楊賢江の著述や『學生雜誌』は不可欠な史料であるといえよう。

しかしながら、こうした觀點から楊賢江や『學生雜誌』を考察する研究は、これまでのところ少ない。また、楊賢江や『學生雜誌』に關する専門的研究も、それほど豊富とはいえない状況にある。<sup>(10)</sup>そうしたなかにあつて例外的に重要なものが、王飛仙『期刊、出版與社會文化變遷』である。同書は、五四前後の『學生雜誌』を分析する過程で、楊賢江と『學生雜

誌』との関わりについても考察を行っており、その成果に本稿も多くを負っている。ただし、『學生雜誌』の編集以前、楊賢江が煩悶していた事実については觸れていない。しかし、この煩悶経験が『學生雜誌』の編集のありように大きく関わっていたのは明確であるので、本稿はこの点にも留意して検討を進めていく。

ところで、部数の多さ一つをとっても明らかのように、楊賢江の主導した時期の『學生雜誌』の影響力は大きかったと考えるべきであり、本来であればもっと注目されてよい研究対象の一つであろう。にもかかわらず、これまで十分に研究されてこなかった理由は複数想起できる。

第一に考えられるのが、『學生雜誌』における楊賢江の主張が、平易な反面、深みに缺けるいわば通俗的なものであったために、従来の歴史研究、特に思想史研究の対象となくなることである。楊賢江の文章が通俗的なものとなったのは、彼の個性によるものばかりではなく、『學生雜誌』が十代から二十代の中等學生や、青年を対象としていたためでもあるはずだが、そうした事情は考慮されぬまま、その主張の内容や意味はあまり検討されてこなかった。

第二に考えられるのが、本稿でも言及する惲代英の存在である。惲代英は楊賢江と同じ一八九五年の生まれであり、亡くなったのも同じ一九三一年である。旺盛な言論活動に加えて、克明な日記を残している惲代英については、思想史の観點を中心に多くの研究がなされてきた。<sup>①</sup>それらの研究が明らかにしたように、惲代英は自身の修養を重視しつつ、社會の問題にも目を向け、やがて中國共產黨の活動に参加していったが、實はこうした歩みは、本稿の議論からも明らかになるように、楊賢江のそれとはなはだ類似している。楊賢江の著述を紐解いても、惲代英について判明している以上の事柄を明らかにし、この時代のとらえ方について新たな知見を提供するのは難しいのではないか。うがった見方かもしれないが、楊賢江に対する研究がいまひとつ盛り上がり上がってこなかった背景には、こうした考慮も暗に働いていたのではないかと想像される。

だが、やはり本稿で明らかにするように、自らの煩悶について『學生雜誌』をはじめとする公開の媒體に率直に文章を綴るだけではなく、『學生雜誌』讀者と煩悶をめぐる諸問題について盛んなやりとりをするという楊賢江の側面は、渾代英と比較してももちろん、同時代の中國においても決してよくあることではなく、そうであるが故に若い讀者を引きつけたと思われる。また、高遠な思索をしていないように思われるために、とりわけ思想史研究の對象とはなりにくかった楊賢江ではあるが、しかし若い讀者にもわかりやすい平易な言葉で語っていたからこそ、『學生雜誌』は多くの支持を集めたのだとも考えられる。このような楊賢江の『學生雜誌』での取り組みは、大學生あるいはそれ以上の知識階級とは異なる、より低位の知識階級の實態を理解する視點を獲得することにつながる。低位の知識階級の果たした役割は、ともすれば見えにくいものだが、彼らもまた中國革命の擔い手だったのであり、その存在を無視することは許され<sup>12</sup>ない。以上の點を踏まえると、楊賢江について検討してみる價值は十分にあるし、また民國時期の思想や文化について廣く理解を深めようとするれば、楊賢江が發したような平易な言葉にも耳を傾ける必要があるだろう。

本稿の構成は次の通りである。まず、『學生雜誌』編集に參與する以前の楊賢江について、彼が何に煩悶しそれをどう克服しようとしたのかに着目しながら論じる。次に、楊賢江が『學生雜誌』の編集に參與していた時期に目を向け、彼が誌上でどういった言論を展開したのかに觸れつつ、彼一人の主張だけではなく、彼と讀者との間のやりとりにも留意して考察を進める。

## 一 日常生活と關心の所在

### (一) 厳しい自己規律

楊賢江の家庭は貧しかったが、父親が學費を工面したので、幼少の頃から教育を受けることができた。地元の私塾で四書五經を學んだのち、一九〇七年に鄭巷溪山初級小學堂に入學、一九〇九年には泗門鎮誠意高等小學堂へと轉學し、中華民國元年に當たる一九一二年、浙江省立第一師範學校に入學している。

當時、第一師範の校長を務めていた經亨頤は優れた教育者として知られ、經校長時代に同校に在籍していた學生たちのなかから、施存統や曹聚仁といったそのち活躍していくことになる知識人が複数出ている。<sup>13</sup> 楊賢江自身もこうした開明的な雰圍氣の下で學生生活をおくっていたようである。また楊賢江は、第一師範の教師であった夏丐尊から、日本語を熱心に學んでもいた。日本留學の希望があったためであり、向學心の強い人物であったことがうかがわれる。

一九一三年になると、第一師範學校の雜誌として創刊された『浙江省立第一師範校友會誌』に文章を發表し、生涯にわたって繼續される旺盛な言論活動の第一歩を踏み出している。一九一五年五月には、『學生雜誌』にも文章を發表し、以降『學生雜誌』に多くの文章を發表していくことになる。<sup>15</sup>

この頃の楊賢江のありようを見てまず目を引くのが、そのきまじめな生活態度である。彼は毎朝五時半に起床、九時半に就寝し、その間の一〇時間半を、學校での授業出席と自身の學習を含めた勉強時間に充てていた。なお、効率を高めるために、一時間につき一〇分の休憩をとることとしていた。

楊賢江はさらに細かく時間を區分し、何をなすべきかを綿密に定めていた。たとえば起床後は、彼にとり清潔に氣を配り運動を行う時間であった。具體的には、起床後の五分間で口と顔を洗い、二分間でお湯を二杯飲み、五分間で大便をす

ることとし、残り約二〇分間を運動時間とした。また自身の學習時間については、どの科目をどれくらいの時間勉強するのか、毎小事細かに区分していた。また彼は、お茶を飲まずお湯を飲むこととしていたが、お湯を飲む時間までも正確に定めていた。一度目は朝、二度目は午前一〇時、三度目は午後三時、四度目は夜九時であり、一度につき二杯飲むと量までも定めていた。<sup>16)</sup>

楊賢江は自らが生み出したこうした事細かな規則を、日程表に書き込むことで明示化し、またそれを着實に実践していくことで自らの身體に刻み習慣化していった。後年にいたるまで、この規則正しい習慣は守られていたようであり、自作の日程表を部屋に貼り付け、それに従って生活していたことを、商務印書館の同僚であった鄭振鐸が回想している。<sup>17)</sup>

このほかにも、彼にはもう一つ大切な習慣があった。それは日記を付けることである。<sup>18)</sup>

残された彼の日記を讀んでまず目につくのが、彼が自己の鍛錬や規律に非常に注意していることである。上述した事細かな規則に従った生活をきちんと実践できているかどうか、自身を査定する記述が大變に多い。なお、日記帳は商務印書館刊行のものを使用している。この日記帳は、欄外に古今東西の名言を印刷しており、修養の大切さを意識させる作りとなっていた。<sup>19)</sup>

## (二) 著名人・偉人へのあこがれ

日記のなかでこのほか目につく記述としてあげられるのが、偉人や著名人への言及であり、孟子、荀子、ニーチェ、ウイルソンらといった古今東西の人物の事績が好意的に取り上げられている。<sup>20)</sup> なかでも曾國藩への言及が多く、その家書や日記を熱心に閲讀し、曾國藩の自己規律のありように感化されることしきりであった。そのため曾國藩を「模範人物」として稱揚するまでになった。<sup>21)</sup> また、修養を通じ成功した人物の事績を多く敘述するサミュエル・スマイルズの『自助

論』(Self-Help)を熱心に読み込んでおり、その詳細な感想文を發表もしている。<sup>(22)</sup>

また、同時代の中國を生きる著名な人物にも、楊賢江の目は向いている。なにかんづく、梁啓超へのあこがれや尊敬の念は、『大中華』を讀むと、梁啓超先生の最近の肖像が掲載されていた。先生の容貌は端正で、眼光は輝いていて銳利であり、雰囲気穏やかななかにも強い力がある。私は何度も見返し、いつも手元に置いていた。先生の耳、目、口、鼻すべて私の頭のなかに入り込み、永遠に忘れることができない。私が先生に傾倒することは、何と極端なのだろう」と日記に書き付けるほどに強かった。同日の日記には、「將來、人から崇拜され尊敬されること梁先生のようになりえれば、私もまた必ず世の中に位置を占めるところがあり、必ず世の中の役に立つ日が来るであろう。努力せずにはいられない」との決意も記され、自分もいつかは梁啓超のようになりたいと、自らを勵ましてもいる。<sup>(23)</sup> 梁啓超の著述への關心も高く、梁が一九一五年に刊行した『大中華』はもちろんのこと、一九〇二年に刊行され一九〇七年まで續いた『新民叢報』を、一九一五年の時點でもわざわざ讀みこんでもいた。

梁啓超、そしてそのほかの偉人・著名人たちは、楊賢江にとり模範であった。だが、彼らは決して手の届かない存在ではない。自らを厳しく律し修養に努めれば、自分もまた彼らのような著名で偉大な人物になることができるとの念を楊賢江が抱いていたことは、その著述のそこかしこに見て取れる。「人生の光明は、顯官になることや利祿を得ることにあるのではない。ただ人格を完全にできてはじめて、本當に成功できるのである」<sup>(24)</sup>との言にも見られるように、楊賢江はまず何よりも人格を重視するからこそ修養に専心したはずだが、それは著名で偉大な人物になりたいという欲求と紙一重であった。

この楊賢江の欲求は、具體的には教育方面で活躍したいという念に結實した。自身が師範學校に在學していること、つまり師範學校生としてのアイデンティティを楊賢江は重視していたのである。

楊賢江によると、師範學校は在校生を將來小學學校の教員とすべく、着實な教育能力と優れた人格を身につけさせる場、すなわち「教育の専修學校」にして、「人格の専修學校」である。<sup>(25)</sup> そうした場で、楊賢江もまた優れた教員となるべく努力を重ねたのである。

この志は壯大であつた。ある日の日記で、『中華學生界』に掲載された無線電信の開発者、グリエルモ・マルコーニの紹介記事を読んで感銘を受けたことを楊賢江は記しているが、次のような氣概も書き付けている。「しかし、彼もまた世界の一人である。私は潛心して研究すれば、必ず得るところがあると信じている。私の立志と彼のそれは異なっているが、私は教育界で盡力したいと望むのみである」。<sup>(26)</sup> 楊賢江は將來、自身も教育の分野でマルコーニに匹敵する業績を上げようとしたのであり、その結果としてマルコーニのように廣く世間に認知されることを拒むものではなかつたであろう。

日記から読み取れるもう一つの事柄として、身體の鍛鍊が擧げられる。楊賢江は毎朝鍛鍊を積み、後年までその習慣を續けていた。その成果は、客觀的にも見て取れるほどのものであつたようである。鄭振鐸は、「彼が用いていたのは、西洋式の寬緊運動器で、呼吸量を増やし腕の筋肉の發達を促せるものだった」と述べ、楊賢江が肉體の鍛鍊に意を用いており、その甲斐もあつて「楊賢江さんの體格は、我々友人たちの中でも、ずば抜けて壯健だった」と振り返っている。<sup>(27)</sup> つまり楊賢江は、文章をものす人士らしからぬ立派な體軀の持ち主だったのであり、彼自身そのことを密かに自負していたやうである。<sup>(28)</sup>

なお身體の鍛鍊と關連して、楊賢江が靜坐に對する強い關心をもち、眞摯に實踐していた點も目を引く。曾國藩が熱心に取り組んでいたことも關係していただであらうが、彼を靜坐へと導くのに大きな役割を果たしたのは、蔣維喬が一九一四年に刊行した『因是靜坐法』であつた。<sup>(29)</sup> 『因是靜坐法』の紹介する方法は精神の安定に寄與すると歡迎され、同書の賣れ行きは好調だつたようである。青年知識人の常として、懷疑や厭世の念にとらわれることのあつた楊賢江もまた、その克

服を願って靜坐に取り組むようになった。楊賢江は蔣維喬に話を聞きに行き、その模様を『學生雜誌』に寄稿するなど、靜坐の實踐は眞劍そのものだった。<sup>(30)</sup>

修養の一環として、キリスト教に関心をもっていることも注目される。楊賢江は聖經研究所に通い、講義を熱心に聴いている。<sup>(31)</sup>ただし心からキリストの存在を認めるにはいたらず、信仰心が生じているわけではない。<sup>(32)</sup>楊賢江が惹かれたのは、教えの内容そのものではなかったようである。日記に、外國人の布教への熱意は敬服に値するし、かの教えに對する服務心や忠誠心は確かに「最上」<sup>(33)</sup>と記したように、彼の心を動かしたのは、教えに向き合う眞摯な姿勢であった。修養に努める自己と、響き合うものを感じていたのではないだろうか。

楊賢江の厳しい自己規律や修養を支えていたのは、すでに明らかなように人格者や偉人になりたいという欲求であったが、こうした欲求は楊一人に特殊なものだったのではない。楊賢江の愛讀していた『學生雜誌』や『中華學生界』は修養を勵行し、そうした修養に努めた西洋の偉人の傳記をもしばしば掲載していた。<sup>(34)</sup>こうした文章に刺激を受け、立派な人物になるべく修養に取り組んだ若き讀者は少なくなかったと想像される。

ただし、楊賢江に特有な事情も存在していた。一九一五年の日記を見ると、田村逆水『成功と人格』（博文館、一九〇七年）を、日本語の勉強を兼ねて非常に熱心に読み込んでいるのがわかる。この著作は、修養して人格を磨くことにより、社會に評價される成功を得られると説くものだが、その前提として「青年は偉人たるを願はざるべからず、偉人たるんとを願ふはこれその生活に生氣あり、剛健の氣ある所以」と述べるなど、偉人になりたいとの欲求を積極的に肯定する。<sup>(35)</sup>田村のこの言明は、楊賢江が倦むことなく厳しい修養を勤勉に實踐できた一つの要因になったのではないだろうか。

日記にはほかに多くの興味深い記載が見られるが、雜誌への投稿のために常に文章執筆に勤しんでいる様子が読み取れることも注目に値する。楊賢江が投稿に熱意を傾けた理由として、いくつかの點が想起できる。

第一に、投稿した文章が実際に雑誌に掲載されると、讀書券を入手できたことである。『學生雜誌』の場合、商務印書館の讀書券が郵送され、それを使って商務印書館の刊行物の購入ができたようである。讀書券である以上、生活を支えるのに資するわけではないが、向學心に燃える楊賢江のような學生にとって、これはうれしい特典であっただろう。

第二に、直接は面識のない人士との交流が生まれる場合があったことである。雑誌に掲載された文章を通じ、讀者やほかの執筆から手紙が送られてくることがあり、これは楊賢江の文章執筆意欲を高めたはずである。<sup>(36)</sup>

第三に、第二の點と關連するが、著名にして偉大な存在になりたいという楊賢江の欲求を満たしてくれることである。すでに述べたように、これは楊賢江に特殊なことではない。當時の青年には立派な人物になるべく自分の主張を世の中に傳えたいという傾向が廣く見られたが、それを實現する手段の一つは、文章を執筆しそれが雑誌に掲載されることであった。楊賢江もまた、修養や教育に對する關心を自分一人の胸の内にとどめておくのには飽き足らず、雑誌という媒體を通じ多くの人々に自らの考えを知ってもらおうとするのに熱心であった。青年たちのなかには自分の文章が掲載された雑誌を、宣傳して回るといふ者もいたようである。<sup>(37)</sup> 讀書券を入手できるのみならず、自分の名が知れ渡り、見知らぬ他者に自分の存在を認めさせることができる、こうした要因が楊賢江をたゆまぬ文章執筆へと驅り立てたのだと見てよからう。<sup>(38)</sup>

## 二 轉機と新たな關心の顯現

### (一) 三つの轉機

非常なきまじめさで修養に努め、また教育や修養に關する主題を中心に旺盛な執筆にいそしんでいた楊賢江に、一九一七年に第一師範を卒業して以降、いくつかの轉機が訪れることになる。

第一は惲代英との交流である。一九一八年、惲代英との間で楊賢江は手紙のやりとりを交わしているが、惲はそのなかで楊に助言をしている。

惲代英は湖北省の人で、武漢の中華大學に學び、このころは同大を卒業して母校の教壇に立っていた。そのかたわら、互助社という、賭博をしない、女性を買わない、酒を飲まないといった規則を遵守し、相互の助け合いを求める團體を組織・運営した経験をもつなど、惲代英もまた、教育や修養に深い關心を寄せる人物であった。

楊賢江が惲代英に送った書信は残っていないが、楊の日記から、楊がまず自身の修養に努め自身の人格を十分に高めてからほかの人々に感化を及ぼしたいと惲に傳えていたことがわかる。これに對する惲代英の返答は、楊賢江が自己をあまりにも重視しているという苦言だったようである。楊賢江は惲代英の文章を読み、その一部を日記に書き寫して「透徹している」と記すほど惲代英を高く評價していた。<sup>(39)</sup> 尊敬する人物からの苦言に、楊賢江は「今にして思うと、私は自身をあまりに重んじていたと感ずる。支えてくれる人も助けてくれる人もなく、私自身を高めることもできていない」、つまり自己の修養に留意しすぎていると深く反省し、<sup>(40)</sup> ほかの人々の修養にもいつそ目を向けるようになっていった。<sup>(41)</sup>

第二に、より巨大な轉機となったのが、廣東省肇慶での経験である。楊賢江は第一師範を卒業後、南京高等師範學校に就職する。同校での仕事に勵む一方、少年中國學會に入會して同會の雜誌『少年世界』の編集に參與するなどの活動にも手を廣げていた。そして一九二〇年になると、高要縣縣長古公愚の招きで、同縣立國民師範補習所教務主任として肇慶に赴くことになった。

だが、廣東省一帯では當時、岑春煊・陸榮廷と陳炯明との間で、粵桂戰爭が繰り廣げられており、高要縣の治安も大いにかき亂されていた。楊賢江は縣城の内外ともに危険な状態にあるなかで過ごさねばならなかった。

肇慶では、補習所はもちろん、商店や學校もすべて閉じられ、行動ははなはだ不自由であった。同地では作文、讀書、

運動しかできず、異性との交際も一切不可能で、修道院のような生活を強いられ、監獄よりも苦しいという状態に置かれたと楊賢江は述懐している。

これらの側面に加えて、非常な恐怖が肇慶には存在していた。それは、粵桂雙方の軍隊による略奪と虐殺である。その程度は子供や外国人も逃れられないほど徹底したものであり、廣東語で應答できないというささいな理由で、簡単に命を奪われた者もいたと楊賢江は記している。楊賢江も廣東語ができなかったため、死の恐怖と隣り合わせのなかで過ごさねばならなかった。

この體驗を通じ、楊賢江は次のような考えを抱くにいたった。すなわち、人の境遇は自分では豫期できず、人は「水面に浮かぶ草」のように頼りのない存在である。しかし、人には浮き草と違う點が存在する。それは、人としての道理を守らなければならないということである。買春、賭博、貪欲、盗み、こびへつらい、賄賂などといった人の道に外れる振る舞いはどうあっても許されず、命の危機が迫るような状況にあっても、正直、奮起、自省といった念の必要は、いっそう自覺されなければならないのである。

この自覺の背景には、人は社會的存在であるとの認識が強まったことがあった。楊賢江は肇慶での經驗について、「この愁いに満ちた都市での生活のなかで、人が當然得べき社會での活動の權利、たとえば行動や交際などができなかったので、精神的に大變な痛苦を感じた。だから、人は生まれながらに社會生活を營まなければならないと思った。ある人が社會を離れて生活するのは不可能である。彼が一般の人と比べて特異な志向を持っているのでない限りは（あのときの肇慶は、非社會的 *msocial* だったといえる）」とも記している。<sup>14</sup> 彼には、人は他者と關係を取り結ばなければ生きていくことができなるとの信念があり、その生を正常で充實したものにするために、人の道にかなった振る舞いが必要だと考えたのである。

以上の考えは突然生じたものではなく、肇慶行き以前から楊賢江の内部に芽生えつつあったものではあろう。だが、肇慶での過酷な體驗が、漠然とした念をより明瞭にさせる作用を果たしたのだと思われる。

第三にやはり大きな轉機となったのが、一九二二年二月頃から始めた上海での生活である。後述のように、楊賢江は『學生雜誌』編集參畫にともない商務印書館に勤務することになり、上海で暮らすことになったのである。

上海暮らしを始めてから、楊賢江は次のような感慨をもらしている。「私は上海に住んですでに半年になる。自身の經驗から、上海社會は賣買式の社會に過ぎず、上海人の生活もまた賣買式の生活に過ぎないと深く感じている」。「賣買式」とは、精神的規範が著しく希薄となる一方、金錢によるやりとり、あるいは「物質的生活」がすべてを規定する狀況を指す。こうした「物質的生活」が基調となっている上海では、「本來の人の生活の面目はすでに失」われ、「惡賢い心を増長させ、狡猾な人間を生み出す大本營<sup>(43)</sup>」と化していると楊賢江は慨嘆している。

このような場では、物質、評判、富貴、權勢などに迫られて人々は日々を過<sup>(44)</sup>ごさざるをえないが、楊賢江から見れば人間本來のありようではない。そのために、「彼らがなすことでは、彼らの眞の人生を表現できず、美の快樂を見いだせていない。そこで物事をなすのを苦痛とみなし、常にそれを呪詛している。種々の煩悶愁苦の現象も、いたるところで生じることになる<sup>(45)</sup>」。つまり上海のような場で生活する人々は、煩悶にとらわれることになるのである。

## (二)「藝術の修養」から社會主義へ

この事態に對處するのに、以前の楊賢江であれば、自己の修養に努めることで煩悶を克服せよと説いたことであろう。實際に彼は、王陽明の著述や『明儒學案』などに言及しつつ、「純潔」や「操守」などの必要性を引き續き訴えている<sup>(46)</sup>。しかし、新しい對應策が表明された點も見逃せない。

それは、「生活の藝術化」、あるいは「藝術の生活化」という考え方の導入である。この構想は、直接にはイギリスの社會主義者で、生活と藝術の一致を説いたことで知られるウィリアム・モリスの議論に示唆を受けて案出された。<sup>(46)</sup>

とはいえ、そもそも「生活の藝術化」「藝術の生活化」は、誰にでも可能なものではない。「藝術を味わいうる餘裕を持つてるのは、人類の中のわずかな人々に限られている」のである。このような制約の下、「生活の藝術化」「藝術の生活化」を進めるために求められたのが、「文學的趣味の養成」であった。「我々は文學創作者になる必要はないが、文學鑑賞者にはならなければならない」<sup>(47)</sup>。つまり、文學を味わうことによつて、「生活の藝術化」「藝術の生活化」を實現しようとしたのである。

なお、鑑賞の対象は文學に限らず、音樂や繪畫も含めた文藝全般にもおよぶ。文藝つまり藝術は、理性に訴えかける科學とは異なり、感情に訴えかけるといふ特質をもっている。これにより人の理想を高め、人の同情を擴大し、人の苦痛を和らげ、人の想像力を開發し、人の觀察力を徹底させ、世俗の利害關係を超越し、ひいては苦惱、煩悶、倦怠などをすべて消滅させるという效用が得られるのではないか、楊賢江はそのように期待したのである。<sup>(48)</sup>

こうした效用をもつ文藝の鑑賞を、楊賢江は「藝術の修養」とも呼び、青年がそれに努めるように説いた。<sup>(49)</sup> その際、「ダーウインの轍を踏んで、晩年になつて生命の損失を嘆息してはならない」<sup>(50)</sup>と、ダーウインの事例を引いていることが注目される。楊賢江によると、ダーウインはその自傳において青春時代を回顧し、かつての詩、繪畫、音樂への趣味が、老年となった今は失われてしまったことを悔いていた。<sup>(51)</sup> 楊賢江は若き讀者に、年老いてから後悔せぬようにと注意を喚起しているのである。だが、實際には「藝術の修養」は、それを説いた楊賢江自身においてすら、うまく働くことはなかつた。

楊賢江は一九二二年二月二四日から三月九日までの間、病氣に苦しみ伏せて過ごすことになった。彼の下した自己診

断によればこれは精神病であり、原因は上海での生活、そして家族主義と資本主義の壓迫であった。ちなみにこの壓迫は、「現在、多くの青年が受けているのは、家族主義と資本主義の害である。家族主義から受けている〔害としては〕、婚姻の不自由が最も顯著である。資本主義から受けている〔害としては〕、求學の不自由が最も顯著である」と述べるように、彼個人に特殊なものではないと楊賢江は考えていた。<sup>22</sup>

資本主義の壓迫、つまり經濟的困窮については、自身の努力により緩和できたようである。だが、彼にとり當時より深刻であったのは家族主義の壓迫であった。

家族主義の壓迫とは、いっそう具體的には妻との關係である。楊賢江は最初の妻と一六歳で結婚している。もちろん、兩人の自由意思に基づくものではなく、周圍の大人たちが取り決めたものである。これは、彼がまだ高等小學堂で勉強していたことであり、結婚式を行い七日間同居しただけで、彼は再び郷里を離れ學校へと戻った。楊賢江にとり、何が結婚であり、何が結婚の樂しみであるのか、まったく理解できないままの結婚生活であったようであり、ほどなく彼はこのありように大きな疑問を抱き始めた。

一九二〇年八月になって、個人の生活の權利を尊重し、社會にはびこる結婚の惡習を破壊するために、楊賢江は最終的に離婚の要求を妻に對して提示するにいたった。楊賢江によると、二人の間には戀愛感情はなく、友情のみが存在するにすぎなかった。妻には勉學の意思があつたので、離婚の代償に生活費と教育費を提供することとし、彼女は女子小學校に通い始めて、兩人の結婚關係は終わりを迎えた。

圓滿に解決したように見えるとはいえ、病臥にまでいたった事實から明らかなように、この關係の清算を濟ませるまでに、楊賢江は非常に苦悶したようである。注目すべきは、この體驗のさなか、楊賢江が「藝術の修養」を頼みとした形跡が見られないこと、そして「藝術の修養」とは距離がある次のような經驗則を引き出したことである。

家族主義や資本主義の壓迫は誰にでも生じうる。こうしたなか、精神病や煩悶に苦しむのはごく普通のことである。楊賢江は「現代の青年で、いかなる煩悶もいかなる失意も感じないのならば、私はあえて言おう、彼は必ず變態的青年である」とまで言い切っている。つまり別の言い方をすれば、煩悶する青年こそ正常であり、煩悶を免れている青年は「變態」であると断じているのである。その上で楊賢江は、「私も煩悶する現代青年である」と率直に自己規定するにいたった。

楊賢江自身は、醫者をしている友人やそのほかの友人の助けによって、病臥を乗り切ることができたが、この體驗は労働者が健康を害した場合、どうやって日々を過ごすのかという問題に思いをいたさせるきっかけとなった。貧しい労働者は醫者に診てもらおうにも、お金も借りられない。費用を拂えない患者は、そもそも診療の対象とならないという現状から、楊賢江は「無産者と病は兩立しないものであり、無産者には病氣をする資格もないと私は思う」と嘆じ、「このたびの病から、資本主義に對する恨みと社會主義に對する望みは、病以前よりもさらに強く感じられるようになった」と、資本主義の拒絶と社會主義への希求を徹底させていくことになった。<sup>(53)</sup>

ところで、楊賢江に大きな衝撃をもたらした肇慶や上海での生活、精神病の體驗についてわれわれがその詳細を知りうるのは、彼自らが筆を執り、そのありさまをつぶさに記して世に問うていたからである。その公開の主たる場こそ、『學生雜誌』であった。

### 三 『學生雜誌』における楊賢江

#### (一) 楊賢江の誌面改革

『學生雜誌』は一九一五年七月に商務印書館により刊行が開始され、刊行の当初から中等學校の學生を主要讀者として

想定していた。編集を擔當していたのは朱元善という人物である。彼は商務印書館の經營を擔う實力者張元濟と同郷であり、その威光を背景に『學生雜誌』に限らず、『教育雜誌』や『少年雜誌』など、そのほかの商務印書館刊行雜誌の編集責任を一手に切り回していた。しかし、當時商務印書館に勤務し朱元善と間近に接していた茅盾によると、朱の編集能力は決して高くはなく、執筆する文章も多くは日本やアメリカの雜誌から翻譯した記事にすぎなかった。しかも、必ずしも彼自身が翻譯・執筆するわけではなく、多くの場合、他人に文章の作成を任せた上で、自分の筆名「天民」の名義で發表していた。<sup>(55)</sup>

こうした条件下では、『學生雜誌』が魅力ある雜誌としてその價值を高めていくことには困難がともなった。同誌を發展させようとすれば、専門的にその編集を擔う人材が必要となったはずである。<sup>(56)</sup>

前述したように、楊賢江は一九一五年から『學生雜誌』に頻繁に寄稿するようになっており、一九一六年には朱元善と面會するなど、同誌そして商務印書館にとり著名な寄稿者の一人だったはずである。そうした経緯もあつてか、一九二一年二月、楊賢江は『學生雜誌』の實質的編集責任者に迎えられ、同誌刷新を指揮することになった。第八卷第七期（一九二一年七月五日）から、誌面の文章を白話文に轉換したのをはじめ、内容についても學生研究號、體育研究號、學習法號、圖文研究法號、青年與戀愛號、青年生活態度號、學風問題號、職業選擇研究號、英語研究號など學生讀者を引きつける多くの特集號を發行し、讀者の興味關心を喚起する工夫を盛り込んでいった。<sup>(57)</sup>そして楊賢江自身、ほぼ毎號に文章を發表し、誌面刷新の先陣を切つていった。

だが、誌面刷新のなかで何と言っても特筆すべきは、讀者からの投稿を掲載し、またそれに對するこまめな返答を掲載するようになったことである。具體的には、第九卷第三期（一九二三年三月五日）から「通訊欄」を、第一〇卷第一期（一九二三年一月五日）から「答問欄」を設置した。前者は讀者と編集部との比較的詳細な問答、後者はその簡潔版であり、

讀者からの質問、およびそれに對する返答を毎號掲載していった。

實は『學生雜誌』には、第一卷からつとに「通訊答問欄」が設けられ運用されていた。ただし、そこでのやりとりの内容は、靜坐あるいは數學に關する質問が大半であつて、それは後述のように「通訊欄」「答問欄」のありようとは大きく異なつてゐる。また靜坐に關して、蔣維喬が返答していることはわかるものの、そのほかの回答については署名がないため、誰が返答しているのか不明である。さらに、第七卷と第八卷では、「通訊答問欄」はほとんど誌面に現れず、事實上機能停止状態にあつた。<sup>(58)</sup>

こうした事態を楊賢江は大きく變えた。彼は「社論は志を同じくする人々に執筆してもらふこともできるが、通訊と答問は自ら執筆しなければならない」と表明し、讀者からの投書への返答に努めた。正確に數えるのは難しいが、楊賢江一人で、五年弱の間に七四二の問いに應答したという指摘もあり、<sup>(59)</sup> 非常な熱意で質問に目を通し、返答を執筆していたことは疑いを容れない。また返答には、楊賢江はもちろん、そのほかの回答者も基本的に署名を附し、誰が回答しているのかわかるようになっていた。これは質問者や同じような悩みを抱える讀者に、親身に相談に乗ってもらつてゐるという感覺を植え付けたようである。

主として「通訊欄」「答問欄」に投書してゐたのは、十代前半から二十代後半の男性であり、その過半が中等學校男性である。同世代の女性からの投稿も皆無ではなかったがきわめて少なく、『學生雜誌』は、閲讀が男子學生に限られてゐるだけではない。なぜ、私たち女子學校の學生は各種の權利を享受できないのか。たとえば、「通訊欄」「答問欄」および投稿などといった事柄はどうか。われわれの疑問は、本欄で「男性からの投稿と」同様に回答を得られるのか」との問いかけが「答問欄」に寄せられるほど、男性讀者に支えられる雑誌だつた。<sup>(60)</sup> 投稿元としては、都市部からの投稿が目立つとはいへ、中國各地から投稿が寄せられ、なかには神戸や臺北からの投稿もあつた。

投稿者は自らについて、「黑暗」のなかを「光明」を求めてさまよっているという表現で説明することがしばしばである。また、自らを形容する語句として、「煩悶」「苦惱」といった語も頻出する。このような投稿者たちを、それぞれに様々な問題を抱える「煩悶青年」と呼ぶことができるだろう。

投書の内容を見てみると、字の間違いのような細かな指摘もときに確認できるものの、進學、戀愛、性、家庭、經濟狀況に關するものが大半であった。古い價値が崩れ去り、新たな價値が確立していないことから生じる煩悶は、具體的にはこうした姿を取って現れたともいえるだろう。そして煩悶に悩む投稿者や讀者にとつて、「われわれは力のおよぶ限り、あなたのために答えを探し出します」と表明し、熱心な回答をしてくれる楊賢江は、頼れる存在であり、常なる交流を求める聲がしばしば寄せられた。<sup>(64)</sup> その結果として『學生雜誌』は、「われわれ全國の學生界が問題を討論する公所」であるとの評價を確立するにいたつたのである。<sup>(65)</sup> そして、『學生雜誌』およびこの「公所」を作り上げた楊賢江は、「良師益友」、「明星」、「保母」、「慈母」、「青年を指導する先覺者」といった評價を受けるようになっていった。

## (二) 團體・社會への着目

膨大な數に上る楊賢江の回答には、共通して見られる一つの特徴が存在していた。それは、青年たちが抱える煩悶が個人的な問題により引き起こされているのではなく、社會の不合理や不正により生じていると強調していたこと、そしてそれらを改めるためには「多數の同志を結びつけなければならぬ」、<sup>(66)</sup> 「團體の力に依據しなければ、有效な動作を生み出していくのはおそらく難しい」、<sup>(67)</sup> と團體の結成と活用を説いたことにある。

社會そして團體への着眼は、「個人と社會は同一物の兩面である」という認識に由來する。<sup>(68)</sup> 楊賢江の考えでは、「我」つまり個人は、「社會我」<sup>(69)</sup> 「群中之我」<sup>(70)</sup> として存在する。すなわち、「人は永遠かつ必然的に人の群の中の人であり、人の生

活は永遠かつ必然的に群性の生活である」、つまり人は社會的存在であり、社會を離れては生きられない<sup>(71)</sup>。そしてこちら、「我々は人から離れて生活できない以上、「獨善其身」を思ったところで、道理に適合しないし、勢いとしても許されない」という認識も生まれてくることになった。<sup>(72)</sup> 修養の目指すところは、「獨善」ではなく、「社會の改善」と「文化の促進」に資する「衆善」「人群の善」でなければならないのである。<sup>(73)</sup> その實現のためには、個人の力では限界があり、ぜひとも團體が活用されなければならなかった。

團體の活用が強調されるようになったのは、惲代英の苦言や肇慶での體驗が大いに關係していたといえよう。そしてこうした認識は、楊賢江を中國で行われてきた修養の問題点についても鋭い批判へと進ませた。

楊賢江の見るところ、中國のこれまでの修養は「性」という虚無的で茫漠としたものを目標としており、實際の到達点を計測できない。身體に説き及ぶことがあっても、消極的な豫防があるのみで、今日の體育の意義は見られない、「個人に偏重して、社會を輕視している」、「意味のない文章に偏重し、實際の活動を輕視している」といった問題を總じて内包していた。つまりは、個々人の修養を重視するばかりであり、さらには修養を説いているようであっても、實際には「珍妙不可思議な言辭をもてあそび、詭計を弄している」という事態に陥ってしまっているのである。<sup>(74)</sup>

こうした批判は、楊賢江がかつて熱心に取り組んでいた靜坐にもおよび、彼は靜坐をやめるばかりではなく、批判するようにもなった。楊賢江は、以前は熱心に靜坐を推奨していたのに、なぜ最近では推奨しなくなったのかという讀者からの問いかけに對し、自身の生活態度が「謹守から懷疑へ、個人の獨善から社會の服務へ、言い換えれば靜から動へといったこと、そしてそこから「體育において、運動が靜坐よりもより重要であると信じるようになった」というのも、靜坐は獨善が過ぎて社會活動を妨害する傾向があるためである」と返答している。<sup>(75)</sup> 靜坐が社會の改善には役に立たず、また運動を輕視する點から、個人の向上にも有害であると問題視しているのだといえよう。そして實のところ、楊賢江の靜坐に

對する懷疑は、一九一八年の時點でつとに芽生えていたものだった。彼は、「私は靜坐をしてすでに三年近くになるが、道理からいつて得られるべき効果はいままでのところ何も得ていない」と、自身の數年にわたる取り組みに意味がなかつたと慨嘆し、<sup>(76)</sup>そこから靜坐には、容易に「消極」に向い、靜坐のさなかの「安逸の境地」を、「極樂」としてしまふという弊害があると日記に書き付けている。<sup>(77)</sup>早くから靜坐に抱いていた不信が、「獨善」への批判的視點の獲得と結びつき、『學生雜誌』上で顯在化したのであろう。

### (三) 失學者・苦學者とのやりとり

「通訊欄」「答問欄」の重要な側面として、學生のみならず、失學者や苦學者とのやりとりが頻繁になされたことが挙げられる。失學者や苦學者とは、經濟的困難から學校での勉學の繼續、上級學校への進學が難しい、あるいは進學できても惡條件の下で勉學を強いられている青年たちを指す。彼らは前途を憂い煩悶し、『學生雜誌』に救いを求めていたのである。たとえば、貧困から學校での勉學を繼續できない青年が、「賢江先生、あなたは私のために力を盡くしてただけですか。勉學を途絶させない方法を私と考えてくれますか」との投書を寄せている。これに對する楊賢江の返答は、「私はあなたに對して同情できるのみで、學問を途絶させない方法を考え出すことはできません。私もあなたと似たような環境に身を置いており、裸一貫の無産者に過ぎないからです。しかし無産者は無産者の心を持つべきであり、無産者の力を持つべきです。我々は學校に入學して勉學することばかりを夢想する必要はなく、我々の心と力を試してみればよいのです」というものであった。<sup>(78)</sup>またより直截に、「現在の學校は、貧しい人の子弟が入學できるものでは本來ない。あなたはお金がない以上、入學しないのがよいでしょう」との返答をすることもあった。<sup>(79)</sup>つまり、經濟的理由から學校に進學できないのであれば、無理に進學する必要はないというのが楊賢江の考えである。とはいえ、投書を寄せた失學者の強い向學

心を放置するわけにもいかない。楊賢江が示した對應策は「自學」、つまり自分自身による學習であった。

學校に通えない、通ったことのない失學者に自學を勧めるのであれば、そのやり方についての懇切丁寧な説明がまず必要となる。ここで楊賢江が説くのが、自學を繼續的に實行していくために求められる條件である。

彼が示した自學の條件は、次の諸點に集約される。まず、相當の基礎を身につけた上で、上級の段階へと進むことが必要である。たとえば、小學校の課程を修了した上で、はじめて中學校の課程に取り組めるということである。そして、怠惰に陥らず、速成を望まないこと、強固な意志をもち、困難、失敗、勞苦を恐れないことが求められる。さらに、きちんとした方針の策定、具體的には適切な書籍の選定と課程の設定を行い、達成可能な目標に向かって着實に努力しなければならぬとされた。<sup>(80)</sup>

以上の注意を與えた上で、楊賢江は自學に取り組んだ人物の紹介を行っている。具體的には、中國の自學の實例として、匡衡、孫康、車胤、江泌、柳璨らといった、いずれも恵まれない境遇に身を置きながら勉學に勵み大成した人々の名前を挙げ、「彼らの用いた方法はすべてを採用することはできないが、彼らの勤勉な勉學の精神は本當に敬服できるものである」と、稱贊を惜しまない。<sup>(81)</sup>

さらに、その紹介の對象はより廣範におよび、フランクリン、リンカーン、二宮尊徳、勝海舟らの事例が紹介されている。紹介で一貫して強調されるのは、彼らが困苦のなか、懸命に勉學を重ね世に名をなしたことである。「古今東西の成業者の傳記は、多くが苦學の歴史である。彼らの成功は、多くが自學の成果によっている」と楊賢江は自學の意義を稱えている。そして「現在の時代が我々の生活に與える壓迫は、昔の人々が受けているものよりもはるかに激烈であるかもしれない。しかし彼らの自學におけるあの深い興味や強固な意思は、我々の勇ましい心を激勵し、我々の氣迫を鼓舞しうるのではないだろうか」と過去の事例を踏まえて自學に臨むように呼びかけてもいる。<sup>(82)</sup>

ここには、苦しい条件の下で自學に勵むことこそが、成功につながる、あるいは學校に入學して學業を積むよりも、失學者や苦學者であることこそ、むしろ成功への近道であるとの考えも透けて見える。失學者や苦學者は貧しい境遇にあること、あるいは十分な學問ができないことに負い目を感じて投稿を寄せる場合も多かつたが、このマイナスの價値を、楊賢江はむしろプラスの價値へと轉換したのである。失學者や苦學者は大いに勵まされたことだろう。<sup>(83)</sup>

楊賢江の推獎する自學において學ぶべきとされたのは、まず何よりも社會科學であつた。その理由は、「自學に際しては、まず人としての常識について相當の習得をしたのち、各人の特性に應じて専門的研究に従事しなければならない。しかし自然科學に關しては、自學に不便な點が多いし、國家の現状に照らすと自然科學の自學には不可能な點もある。自學の難易度と需要の緩急を比較すると、社會科學を研究するのが適當である」ためである。<sup>(84)</sup> 自然科學とは異なり、自學で學ぶことができ、今日必要とされている度合いも高い社會科學が、取り組むべき適當な對象とされた。

社會科學を推獎するのには、ほかにも明確な意圖があつた。それは、中國の改造や革命に役立てるといふことである。<sup>(85)</sup> 「本當に中國の改造を欲するならば、最もすぐに必要なのは社會科學である。社會科學は我々に社會の進化の情景、社會問題の状態、各國の革命の歴史、中國の現状の由來、及び種々の改造事業における注意すべき點を教えてくれる」<sup>(86)</sup>、「最も肝要なのは、やはり社會科學を提唱し、社會學者の理論の中から社會を改造する道を見つけ出すことにある。あわせて實際に國民革命運動に参加し、中國の進歩にとつての二つの障害物、すなわち國內の軍閥と外國列強を打倒しなければならぬ」といった言明が示すように、社會科學は眼前の中國の苦境を打破し、新たな道を切り開くための強力な武器として期待された。そしてそのための教材として、社會問題、社會思想、近代中國史、西洋史に關する書物の閲讀や、時事を評論し學理を研究する雑誌、具體的には『新青年』、『前鋒』、『嚮導』、『中國青年』、『新建設』といった雑誌の閲讀が勧められている。<sup>(87)</sup> いずれも中國共産黨と深い關わりのある雑誌である。これは楊賢江自身が、一九二二年に中國共産黨に入黨し

ていたこともちろん深い関係があるだろう。彼の説く改造や革命は、中國共產黨に寄り添うものだったのである。

なお、楊賢江の説く社會科學の學習においては、一定の時間をかけて専門知識を身につけることが、十分に重視されているとは思われない。まして、學術的研鑽に努めることが推奨されているようにも見受けられない。むしろ青年に對し、社會科學に關する基礎的または最低限の知識を身につけた上で、ただちに改造や革命へ飛び込んでいくことを求めている。今日から見ると社會科學は結局のところ、改造や革命實現のための手段にすぎなかったようにも讀み取れる。とはいえ當時の青年にとっては、改造や革命實現につながる社會科學を學び取ることが、彼らの抱える煩悶を解消し新しい展望を指し示すと信じられていたのであり、社會科學こそがすべての問題を解決する體系として、熱い期待を背負っていたのである。<sup>(88)</sup>

#### (四) 青年と政治

中國の改造と革命の必要、そしてそのために社會科學の意義を強調する楊賢江は、青年と政治との關わりについても意見を表明している。青年と政治との關係はいかにあるべきか、五四運動を経た中國では、この點について複數の見方が存在しており、人は政治から逃れられないのであり、そうである以上、青年は政治に積極的に向き合いその改善に立ち上がるべきとする陳獨秀のような見方、學生が政治的問題に關心をもつことを尊重する一方、しかし學生である以上、政治的な實踐よりもまずは學業に専念すべきであるとする蔡元培や胡適らのような見方が存在していた。<sup>(89)</sup> このほか、個々の學校現場では様々な聲が飛び交っていたと思われるが、教師たちの間では政治に關わるなという聲が根強かつたのではないかと豫測される。中國の教育者は以前から政治を問わない、したがって青年が政治に關與することも容認しないという見解を往々にして抱いていると楊賢江が糾弾していたからである。

だが、楊賢江によると「これは實は大變な誤りである」。「アリストテレスは、「人は政治的動物である」と述べている」が、その指摘の通り、人と政治の關係は昔から緊密である。そして「現代人の生活する範圍にあつては、政治から離脱するのはさらに難しい。現代人の生活は、共同の生活であり、多方面の生活である」<sup>90</sup>からである。つまり今日の世界に生きる人々は、家庭の父母や子女、學校の教師や學生、地方の住民、職業世界における被雇用者、さらには國家の國民といった多岐にわたる側面を一身に帯びており、その結果として否應なしに政治と接觸せざるを得ない。そうである以上、人は政治と関わっていかなければならないのである。

政治に関わるべき程度は、現在の中國ではことのほか強いものだった。楊賢江の見るところ、中華民國の現状は政治では「軍閥」の跋扈により「民主國」ではなく「軍主國」、經濟では外國資本主義の「奴隸」となっており、自由で獨立した國家とはいえない状況にある。これを放置して政治に関わらないのであれば、そのような人は、「木偶」「呆子」「廢物」「懦夫」同然である。そして青年の責任は、「青年學生が國事に對して依然として非常に不案内で、非常に冷淡である」とすれば、それは不幸な事柄であるといわなければならない。そして民主國家にあつては、それはさらに恥ずべき事柄である」と斷言されるほどにとりわけ重い。「軍主國」から「民主國」への轉換には、青年の奮起が不可欠だったのである。

青年の政治への關與とは、官僚や議員になることではなく、「研究」「觀察」「表示」を通じてなされなければならないというのが楊賢江の考えであった。「研究」とは、政治の原理および民主國家の政治の仕組みを研究することを指している。「觀察」とは、眼前の政治状況を觀察すること、具體的には、新聞や政治を評論した刊行物を多く讀むことを指している。「表示」とは、宣傳運動や示威運動などを行うことであり、政府や國會に對する誓願は少なくし、民衆に對する啓發を多く行うべきであるとの注意も附されている。<sup>91</sup>しかし、「研究」や「觀察」はあくまで「表示」のためのもの、「民主國」實現のためのものであつて、それ自體として研鑽を深めていくことが想定されていたとは思われない。改造や革命へ

の献身を勧める楊賢江の筆致が、激烈だったからである。

楊賢江は青年に向かつて、「あなた方はまだ目を覚ますことができます。あなた方は目を覚まさなければならぬ。あなた方にまだ熱い血潮があり、あなた方にまだ余力があるならば、あなた方がその血と力を用いて敵を殺すよう勧めたい」と唱え、聶政、荊軻、徐錫麟、史堅如らを「血性」をもった青年の先驅として稱えている。彼らは逼塞した現状打開のために、いずれも暗殺を試みた者であるが、「この時期にまさに必要なのは、こうした英雄的事業である」というのである。楊賢江は、「私は我が國の普遍的で猛烈的な青年運動が、新中國の基礎を創造するよう願っている」とも述べているが、「普遍的で猛烈的な青年運動」とは、暗殺も是とする苛烈なものだった。

このような勇ましい意見に觸發されたある讀者は、次のような投書を寄せている。この讀者によると、電報、ビラの配布、輿論への訴え、デモといった手段を繰り返しても、「軍閥」は依然として存在しており、これら「慈悲」的な軍閥排除法には賛成できない。彼によると、いま必要なのは、「直接的國民革命」であり、「救國決死隊」を組織し、死を恐れぬ犠牲精神で「軍閥」と戦っていかねばならない。そして奮闘の手段は、爆弾のみであるという。この投書には、「自由の代價は鐵と血のみである」、「本物の自由を得ようとすれば、鮮血を漲らせなければないと確信している」との激しい意見も連ねられている。つまり、「軍閥」打倒と自由獲得のためには進んで犠牲を拂い場合によってはテロリズムも辞さないとの趣旨なのだが、楊賢江は「あなたの意見ははなはだもつともです」と返答し、積極的な賛同を示している。<sup>(83)</sup>

ただし、こうした決意は、個々ばらばらな状態で存在してよいものではなかった。それらを結びつけまとめあげる存在、つまり何らかの團體を経由してはじめて有効な力たり得る。人を社會的存在として捉え、團體の意義を強調する楊賢江にとりこれは當然である。そしてその團體こそ、中國國民黨であった。

ある讀者は「外交の壓迫、軍閥の横暴、政治の暗黒という状況から抜け出したいのであれば、人々はただ中國國民黨に

付き従って進んでいくしかない」のであり、特に「中等以上の學生は、すべて國民黨に加入し、政治運動や軍閥打倒の先鋒となるよう絶對的に主張する」と訴えているが、楊賢江は「あなたの見解に、私はとても賛成です」と賛辭を惜しまない<sup>94</sup>。また別の讀者は、「社會改造の志がある人は、「軍閥と帝國資本主義の打倒」、「革命」を宣傳するばかりではなく、同時にどのようにして「打倒」し「革命」を遂行するのか理解しなければならぬ」と表明した上で、そのための具體的な方法は、中國國民黨への賛成であると主張しているが、楊賢江は「あなたが國民黨に賛成されるのは、とりわけ識見があることです」と返答している<sup>95</sup>。國民革命、中國國民黨への支持と参加を表明する讀者に對し賛意を示し、ほかの讀者もそうするよう事實上促しているのである。共產黨員であつた楊賢江が、中國國民黨への支持と参加を呼びかけたのは、一九二三年六月、中國共產黨が第三次全國代表大會で、國民黨と革命統一戰線を結成すること、共產黨員が個人の資格で國民黨に入黨することを確認していたことによる。

なお、上述のやりとりにも見られる外國の壓迫に對する反發は、教會學校批判へと楊賢江を導いてもいる。讀者とのやりとりのなかで、教會學校について、「彼らはまさに「靈魂を殺す」死刑執行人である」と楊賢江は強い言葉で論難し、外國人および彼らに從う中國人に、中國の教育權が奪われることに警戒感を顯わにしている<sup>96</sup>。かつての楊賢江は、キリスト教に敬意を拂っていたがそれは雲散し、キリスト教に對する敵意を隠すことなく、容赦ない批判へと向かつていった。

#### (五) 讀者からの苦情

多くの問題を取り上げ、また熱心に應答し、ときに自らの煩悶も率直に書き記すという楊賢江の姿勢は、讀者の間に大きな共感呼んだ。また讀者は投稿欄を讀み、他の人も自分と似たような苦境に立たされると知ること、自分の苦境に立ち向かつていく力を得ることができた<sup>97</sup>。さらに、「通訊欄」「答問欄」を通じ、誌面作りに参加できる機會を得られ

ることも大きな魅力だったのではないかと想像される。<sup>(98)</sup> こうした諸要因から、「通訊欄」「答問欄」は支持を集め、活況を呈した。

もつとも、「通訊欄」「答問欄」がいかなる不満も生まなかったわけではない。返答が不親切である、あるいはそもそも返答がない、<sup>(99)</sup>といった苦情がときに見られる。しかし、なかでも深刻なのは、文藝の理解をめぐり寄せられた苦情である。楊賢江は『學生雜誌』に執筆した文章で國民革命への献身を説く一方、詩集の発行や文藝サークルの結成に力を注ぎ、「情感の表出」や「人生の慰め」などに意を用いてはならないと説いていた。これに對しある讀者は、「文藝は人の内心をつなぐ道具であり、人の心を燃やす火種である。ロシアには偉大な文學があつたからこそ、偉大な革命が生じたのだ」と文藝や文學を高く評價しつつ、その姿勢から楊賢江に對し、「あなたは實利主義をいささか迷信されるあまり、文藝を幻想とみなされているようです」との批判を寄せた。<sup>(100)</sup> 楊賢江が文藝の意義を評價していないとの不満を呈しているのである。楊賢江はこれに對し、「私は文藝に反對しているのでは當然ない」としつつ、「私は消沈し退廢した生活をおくり自らを「新文學家」と任じている人が、大膽にも發表している氣迫も生命もまったくない「作品」に反對しているのである」との返答をしている。つまり、楊賢江も文藝や文學の意義を認めてはいる。ただし彼にとり文藝や文學は、青年を鼓舞し革命に驅り立てるものでなければならなかった。ここには、そうしたもののしか文藝や文學に値しないとの發想も見て取れる。<sup>(101)</sup>

同様の發想は、次のやりとりにも看取できる。放縱や墮落、厭世や自殺といった青年が抱える問題に對して、「こうした問題の解決には、藝術から着想して、藝術で人生を調和し、人生を慰藉し、人生を無味乾燥なものとしなないようにしなければならぬ。いわゆる藝術化された人生が、人生の意義を増進できるのである。こうしたことを私は信じている」と藝術による救済を唱える讀者に向かつて、楊賢江は「あなたは藝術により人生を調和させ青年の悲哀を救済しようとする主張しているが、私はあまり賛成できない」との不満を隠さない。<sup>(102)</sup> 楊賢江の觀察によると、現在の青年が悲哀に陥る原因は、

現代資本主義の侵略、國內「軍閥」の跋扈、舊來の禮教の支配、不良教育制度の影響といった諸點にまとめられる。そして、青年に悲哀をもたらすこれらの問題を、藝術や文藝の力で解決しようとするのは、このときの楊賢江からするとあまりにも迂遠であった。むしろ「我々が悲哀を排除したいのなら、我々はこれらの障害を正しく見極めて奮闘していくしかない」<sup>(16)</sup>。つまり聶政らに見られる犠牲やテロリズムも辭さない果敢さで、問題に直接立ち向かっていかなければならない。このことを楊賢江は、「現在の問題はいかにして食べられるものを得るのかということであって、いかにして上手に調理できるのかということにはない。美味しく食するということに意を注ぐのは、やはり以後の事柄である」<sup>(16)</sup>とも表現している。藝術や文藝の意義を抹殺するわけではないが、それらは直面する問題の解決には役立たないと考えていたのである。

しかし、楊賢江の如上の應答は、煩悶解決のために藝術や文藝を評價していたかつての立場と明らかに矛盾するといわねばなるまい。楊賢江の藝術や文藝に對する評價が容易に變化したのは、おそらく文藝や藝術の素養に乏しかったためであろう。日記を見てただちに明らかのように、彼は偉人の傳記や修養に強い關心を向けそれらに關連する著述を讀み込む一方、文學と違って普通想起されるような作品については記載しておらず、そうした作品はほとんど讀んでいなかったとおぼしい。<sup>(17)</sup> また、藝術について關心を寄せている様子も見られない。文藝や藝術について豊かな素養をもっていなかったので、それを捨て去るのに葛藤がなかったのではないかと思われるのである。<sup>(18)</sup>

#### 四 楊賢江の卓越の背景

##### (一) 楊賢江の魅力

煩悶に苦しんだ楊賢江は、その過程で資本家の跋扈、無産者の苦境という問題に目を向けるようになる。そして、こうした問題こそが煩悶を引き起こす要因と考え、その解決を目指すべく社會を意識した修養の強調や革命への獻身を訴えていった。

とはいえ、このような楊賢江の主張は、當時にあつてはそれほど目新しいものではない。こうした主張は、楊賢江が獨自に創造していったものではなく、彼が當時の有力な見解を捉え發信に努めたというべきであろう。文藝、靜坐、キリスト教に對する態度が大きく轉換したのも、彼一人が疑問を感じてそのようにしたというよりは、周圍の思潮に感化されてのことであろう。

ここで問うべきは、取り立てて獨創性に富んでいたとはいえない楊賢江の主張が、なぜ讀者を引きつけ、大きな共感を得ることができたのかという問題である。その答えは、『學生雜誌』という媒體に求められる。

本稿冒頭で述べたように、五四時期、中國の青年たちは新しい知識に觸れたことにより、あるいは新しい環境に身を置いたことにより、自我を安定させることができず、煩悶に苦しんでいた。煩悶する青年は往々にしてその苦しみを一人で處理できず、同じ境遇に苦しむ人との結びつきや助言を求めるものである。『學生雜誌』、特にその「通訊欄」「答問欄」は、「私たち全國學生界の問題を討論する公所」として、具體的な助言を與えるばかりではなく、他者との結びつきの感覺を提供し、孤獨感を和らげる場として機能した。つまり、「通訊欄」「答問欄」でのやりとりを通じて、煩悶する讀者は慰藉を得て煩悶がある程度は軽減させることができたのである。

もちろん「通訊欄」「答問欄」がうまく機能したのは、教育者たらんと強い自負をもっていた楊賢江の貢献が大きい。楊賢江が悩みに眞摯に答えていったのは、師範學校で培った教育者としての責任感によるところが大きかったのだろう。楊賢江の應答は、讀者の意見に對する同情、贊同、敬服といった調子で始まることが多く、投稿者に寄り添う姿勢が鮮明である。また困苦にあえぎ學問斷念を迫られている投稿者に對し、「私はあなたに對して同情できるのみで、學問を途絶させない方法を考え出すことができません。なぜなら、私もあなたと似たような境遇にあり、裸一貫の無産者にすぎないからです」と、率直に自身の弱みをさらけ出す場合もあった。<sup>111</sup>彼の應答は、必ずしも言葉巧みではなかったかもしれない。しかし、家族を含めて周圍に理解者を得られず、慣れない環境で一人孤獨に悩むことの多かった投稿者にとっては、眞剣に耳を傾けてくれるという楊賢江の姿勢だけで十分であった。加えて、楊賢江自身も煩悶した経験があり、その應答は親身で説得力があった。煩悶した経験が武器となったのである。

彼はまた誌面を通じ、各學校に設けられている學科や入學條件といったことや、自學の參考となる書籍といった、青年の勉學や生活にとり有益な情報を随時提供した。<sup>112</sup>このことは、特に學校に通學できない讀者にとつて、『學生雜誌』が一定の程度學校の機能を代替することにつながった。こうした努力により、楊賢江、そして『學生雜誌』に對する信頼は揺るぎのないものとなり、「良師益友」としての評価を確立したのである。

ただし、楊賢江の『學生雜誌』運営への献身は、教育者としての自負のみならず、日記に見られた、偉人への強烈なあこがれに支えられていた部分もあったと考えるべきだろう。楊賢江はこの献身を通じ、實際に名聲を手にすることができ、名聲を得たことで、それをさらに高めようという欲求はいや増していったはずである。

## (二)「分身」の出現と楊賢江の議論の位置

「通訊欄」「答問欄」における議論には、ある顕著な特徴があったことも指摘しておかなければならない。それは多くの投稿者が、楊賢江と同じ主張を同じ口調で語っていたことである。彼らは、楊賢江の主張に熱烈に賛同して「通訊欄」「答問欄」に投書する、楊のいわば「分身」であった。この多数の「分身」の出現は、楊賢江の意を大いに強くしたのではないかと思われる。自信を得た楊賢江がより果敢な言論を発表し、それにさらに多くの支持が集まるといふ相乗効果が働いていたといえるのではないだろうか。

この相乗効果により、華崗や樓適夷といったやがて革命に従事していくことになる人材が複数輩出されている<sup>13)</sup>。もちろん、楊賢江とのやりとりのみが革命への参加を促したわけではないだろう。しかし、革命への献身が全面的に稱揚される言論空間に早い段階で身を置いたことは、その後の彼らの歩みに大きな意味をもっていたと考えるよかるう。そして、実際に投稿したわけではないにせよ、『學生雜誌』に感化されて革命の道へと進んでいった読者は、ほかにも大勢いたことだろう。

ただし見方を變えると、楊賢江とその分身たちが構成するこの言論空間では、彼らと異なる立場の議論の提示が、事実上ほとんど許されなかったのではないかと推測される。楊賢江と読者との「公所」におけるやりとりは、開始された当初は、読者の寄せる様々な悩みに、個々の状況に應じて丁寧な返答をすることに特色があった。しかし、次第に「公所」にもち込まれるあらゆる問題の原因が、「軍閥」の跳梁跋扈、列強の中國侵略、資本主義の弊害といった事象に收斂していき、その解決策として國民革命への従事が唱えられるようになっていく。中國共産黨に入黨し、「革命的教育のみが、中國が必要とする教育である。革命的教育者のみが、中國が必要とする教育者である」との信念をもつようになっていった楊賢江にとって<sup>14)</sup>、これは當然のことではあった。だがその結果として、たとえば上述したように、『學生雜誌』で提起

された文藝や藝術理解に關する疑義は誤りとして退けられ、議論が深まっていくことはなかった。つまり、異議申し立てが眞摯に受け止められる仕組みは、「公所」ではほとんど働かなかつたように見て取れる。『學生雜誌』が「公所」と呼ぶにふさわしい場であつたのかは、疑問が残る。<sup>15</sup>

こうした楊賢江の思考枠組みの下では、「私は失戀した青年で、いろいろなことに對して悲觀しています」と訴え煩悶している青年からの救いを求める投書は、次のように處理されることになる。「人生では失意することが本當に多い。我々の國家が毎年どれだけの利益を外國人にむざむざ與えているのかわからないが、こうした苦痛は個人の失戀と比べて軽いものだろうか。我々が視野を廣げ責任感を大きくもてば、個人の失戀などいかほどのことでもない。私は戀愛が個人の生活で重要であることは認めるが、しかし失戀を過分に重大視する必要はない」<sup>16</sup>。失戀をはじめ、煩悶を生じさせる要因は個々別々であろう。そしてこの個々別々の事情の背景に、楊賢江が指摘するように社會的要因が關係していることも確かであろう。しかし、國家の苦しみに思いをいたし、革命に參與していくだけで、個々人の煩悶は解消されるのだろうか。

楊賢江は自信に満ちた態度で、「そうだ」と答えることだろう。だが、かつての彼が藝術に一度は救済を求めたように、國家の命運や革命への獻身では癒やしきれない煩悶が確實に存在するのではないか。分身たちの集う言論空間で煩悶を解消し自信を深めた楊賢江にとり、あらゆる煩悶は自分と同じように解消されるべきであり、文藝や藝術への向き合い方などはもはや取るに足らない問題だったのかもしれない。

とはいえ、多くの同時代の知識人にとり、この問題は楊賢江のように簡単に處理できるものではなかつた。煩悶については、たとえば郁達夫が國外のような文藝を讀み込みながら執拗に著述を續けていたし、楊賢江が放棄した「生活の藝術化」「藝術の生活化」については、周作人が思索を深めていくことになつた。<sup>17</sup> また、郁達夫や周作人とも異なる道を歩む

者もいた。一例として挙げられるのが、虚無主義を標榜した朱謙之である。煩悶にとらわれた彼は、そこから抜け出すべく自己をも含めた一切を否定する虚無主義を唱え、學校における一切の試験や成績評價の廢止を訴える廢除考試運動などの實踐に關與していった。<sup>(18)</sup> 虚無主義の下では、國家もむろん否定の對象であり、楊賢江が説くような國家の命運への關心は、積極的なものとしては語られにくかった。

だが、過半の煩悶青年、特に『學生雜誌』の讀者であった中等學校レベルの青年にとつては、楊賢江の言葉が最も胸に響いたのではないかと推測される。文藝や藝術を味わうというのはあまりに迂遠な對應策であり、また貧しさから十分な學問のできない者には、そもそもそのような餘裕が存在しなかつたことだろう。また、自己すらも否定する朱謙之の議論は、廢除考試運動が結局は失敗したことからも明らかのように、あまりに過激であり、十分な支持を集めて持續する可能性に乏しかった。<sup>(19)</sup> これらの議論に對し、煩悶青年に煩悶の原因が社會に存在すると教え、解決のために社會の變革を説く楊賢江の議論は、迂遠と過激の中間に位置するものとして受け入れられやすかつたのではなからうか。<sup>(20)</sup>

ただし、迂遠と過激の中間に位置するという點では、たとえば本稿でも言及した惲代英の議論も同様であつて、楊賢江一人に特殊というわけではない。それでは、楊賢江と惲代英の議論に、何かちがいは存在するのだろうか。

惲代英もまた、その献身、まじめさ、面倒見の良さなどから「良師益友」と稱えられた人物である。<sup>(21)</sup> 彼も煩悶に苦しむ讀者からの問いかけに對して、親身になつて答えてはいる。返答の主旨も、楊賢江と同様、革命に献身せよと訴えるものであつた。<sup>(22)</sup> ただし惲代英は、楊賢江のように「通訊欄」「答問欄」を通じて廣範な讀者と常にやりとりをしていたわけではない。惲代英の主導する雑誌『中國青年』にも類似の欄は設けられていたが、讀者とのやりとりの頻度は『學生雜誌』に遠くおよばない。また『中國青年』も『學生雜誌』同様、青年を主たる讀者として想定していたが、その誌面を飾る文章の多くは、より中國共產黨の活動に密着したものであり、社會主義や勞働問題に關心がなければ讀みこなすのが難しい

ものだった。<sup>135</sup>『學生雜誌』と比較して水準が高かったのである。楊賢江は『學生雜誌』で社會科學のさらなる學習のために『中國青年』を讀むようしばしば勧めているが、これは彼自身、『中國青年』が『學生雜誌』の上位に位置すると認めていることにほかならない。實際に、華崗らはまず『學生雜誌』の平易な説明に導かれるかたちで、革命への従事へと進んでいったのであった。楊賢江そして『學生雜誌』の平易さや通俗性こそが、最初から十分な知識を有していたわけではない青年たちに、強い訴求力をもっていたのである。

### 結びにかえて

一九二七年二月、楊賢江は『學生雜誌』編集の仕事から離れ、それ以前から關與していた中國國民黨上海市黨部の活動に全力を注ぐことになった。だが、同年の上海クーデターの發生により、中國共產黨員であった彼は指名手配の對象となり、地下活動を餘儀なくされる。ただし、厳しいはずの生活環境下にあっても著述活動は衰えを見せることはなく、教育に關する論説を『教育雜誌』を中心に多數發表し、また『教育史ABC』（世界書局、一九二九年）や『新教育大綱』（南強書局、一九三〇年）といった著作も刊行している。このほか、翻譯にも意欲的であり、やはり教育關連の論説を中心に多數の翻譯を複数の雜誌に發表するかたわら、さらには『世界史綱』（創造社、一九二八年）や『家族、私有財産及國家之起源』（新生命書局、一九二九年）、『青年期的心理與教育』（世界書局、一九二九年）などの譯書を刊行している。<sup>136</sup>

旺盛な言論活動を展開した楊賢江ではあるが、しかしその影響力は低下したといわなければならないだろう。それは、楊賢江の見解が人目を引くような獨創的なものではなかったことに加えて、彼の見解を社會に傳播し共鳴を引き起こす媒体であった『學生雜誌』を手放したからにはかならない。その結果、楊賢江の帯びていた「良師益友」というイメージも

消えてしまうことになった。

雑誌の顔ともいえる楊賢江の去った『學生雜誌』にも、變化が生じていった。顯著なのが、「通訊欄」「答問欄」の歸趨である。「通訊欄」については、楊賢江在籍時からすでに設けられなくなっていた。楊賢江の強いられる負擔が、あまりに過大であったのかもしれない。ただし、楊賢江は『學生雜誌』への旺盛な執筆と「答問欄」でのこまめな返答を續けていたので、彼の在籍時は「通訊欄」の廢止がそれほど目立つこともなかった。「答問欄」は楊賢江の離脱後も繼續されたが、楊の在籍時は返答に署名が附され、誰が返答しているのが明らかであったのに對し、楊が離れて以降は署名がなされぬようになり、誰が答えているのが判然としなくなった。楊賢江に代表される編集者が、親身に答えてくれるというのが、『學生雜誌』の魅力の一つであったはずだが、それが失われてしまったのである。讀者を引きつける親身さの體現は、多大な勞力を要するものであり、それは楊賢江のような熱心な人物をして、はじめて可能なことだったということかもしれない。

また、楊賢江が『學生雜誌』から身を引いて以降、彼のように頻繁に論説を發表する人物は見られなくなり、革命への献身を求める論調も、同誌から消失したわけではないにせよ明らかに弱まった。『學生雜誌』は、革命とは必ずしも関わりのない論點についての文章が、複数の著者によって中等學校の學生向けに發表されていくという雑誌へと變質していったのである。<sup>(15)</sup>

『學生雜誌』を離れた楊賢江が「良師益友」たり得ないように、楊賢江を失った『學生雜誌』も「良師益友」としての立場を保持できなくなった。煩悶青年を引きつけ革命へと驅り立てる楊賢江主導下の『學生雜誌』は、ここにその役割を終えたのである。

しかし、いうまでもなく煩悶青年そのものが姿を消したわけではないし、彼らと政治との関わりが途絶したわけでもない。煩悶をいかに解消するのか、そこに政治をいかに關連づけるのかという楊賢江が提起した問題は、こののちも問題で

あり續けた。<sup>(18)</sup> その内實はしかし複雑多岐であるため、別稿での議論を要する。

なお、本稿では日本の煩悶青年との比較・対照を行うことができなかった。しかし、煩悶青年という概念そのものは、中國獨自で生成したというよりは、日本に由來して人口に膾炙するようになったものである。<sup>(19)</sup> 兩國の煩悶青年の間になる類似や差異があるのか、その詳細を検討するためには特に中國側の事例のさらなる調査が必要となるが、これは今後の課題としたい。

註

- (1) E. H. キンモンス(廣田照幸ほか譯)『立身出世の社會史——サムライからサラリーマンへ』玉川大學出版部、一九九五年、一八九―二五四頁。
- (2) 坂本多加雄「知識人——大正・昭和精神史斷章」讀賣新聞社、一九九六年、五六―九四頁。
- (3) 竹内洋『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望(増補版)』世界思想社、二〇〇五年、一一九―一四〇頁。
- (4) なお、煩悶のほかに、煩惱、苦悶、厭世といった表現もしばしば用いられたが、それらの意味するところは基本的に同一であった。
- (5) 煩悶という現象が、民國時期の政治的・社會的運動に巨大な影響を及ぼしていた事實を、王汎森氏が指摘しているが、しかし、その詳細についてはまだ手つかずのままとなっている点が多く、同氏も強調するようにさらなる研究が求められている状況にある。王汎森「煩悶の本質是什麼——「主義」與中國近代私人領域的政治化」『思想史』第一期、二〇一三年九月。もちろん、民國時期の文學を對象とした研究においては、煩悶に關わる問題が議論されており、煩悶を一つの主要な題材として創作に勵んだ郁達夫に關する研究成果をはじめ、參照に足
- (6) 白華「青年煩悶解救法」『學燈』一九二〇年一月三〇日。著者の宗白華(一八九七―一九八六年)は、のちに美學者・哲學者として知られることになる。當該記事執筆當時は、『學燈』の編集に參與していたが、ほどなくドイツ留學へ出發している。
- (7) 張承仙「在紀念楊賢江同志逝世五十周年大會上的講話」楊賢江教育思想研究會編『楊賢江紀念集』商務印書館、一九八五年、一頁。
- (8) 王飛仙「期刊、出版與社會文化變遷——五四前後的商務印書館與『學生雜誌』」國立政治大學歷史學系、二〇〇四年、一一一頁。
- (9) 一九一六年時點における中等學校在籍者は約一一萬人(うち、女子は約八千人)、一九二二年時點で約一六萬八千人(女子は約一萬四千人)、一九二八年時點で約一九萬七千人(女子は約三萬七千人)とされている。教育部編『第一次中國教育年鑑』一九三四年、七五―一四五頁。
- (10) 楊賢江については、教育關係の著述を多く残していることから、その教育觀に關する研究が比較的集中してなされてきた。中國の主な研究として、潘懋元等『馬克思主義教育理論家楊賢江』人民教育出版社、一九八三年。孫培青等編『楊賢江教育思想研究』華東師範大學出版社、

- 一九八九年、張健華・黃永剛『楊賢江現代教育理論體系研究』浙江大學出版社、二〇一五年、などがある。日本語の研究として、齋藤秋男・新島淳良『中國現代教育史』國土社、一九六二年、一四八一—四九頁、齋藤秋男・市川博『中國教育史』（世界教育史研究會編、世界教育史大系第四卷）講談社、一九七五年、三〇三—三〇七頁、長谷川豊『中國における新教育の受容（三）——楊賢江と學習法』『關西教育學會紀要』第三三號、一九九九年、がある。また、傳記として金立人・賀世友『楊賢江傳記』光明日報出版社、二〇〇五年。年譜として、潘懋元主編『楊賢江年譜長編』光明日報出版社、二〇〇五年、がある。なお、著譯述をまとめた、任鍾印主編『楊賢江全集』全六卷、河南教育出版社、一九九五年、があり、日記を収録するなど有用である。
- 中國語はもちろん、日本語でも複数の優れた業績が出されている。本稿では、特に以下の業績を参照した。小野信爾「五四時期の理想主義——惲代英の場合」、『東洋史研究』第三八卷第二號、一九七九年九月、後藤延子「惲代英の出發——五四前夜の思想」、『人文科學論集』第一六卷、一九八二年三月、砂山幸雄「五四の青年像——惲代英とアナキズム」、『アジア研究』第三五卷第二號、一九八九年二月、狭間直樹「五四運動の精神的前提——惲代英のアナキズムの時代性」、『東方學報』第六一卷、一九八九年三月、後藤延子「惲代英の五四時期の思想——日記を中心に（一）」、『人文科學論集（信州大學）』第二八號、一九九四年三月、後藤延子「惲代英の五四時期の思想——日記を中心に（二）」、『人文科學論集（信州大學）』第二八號、一九九五年三月。この点については、陳永發『中國共產革命七十年 修訂版（上）』一四五—一五三頁、の議論も参考になる。
- (13) 當時の第一師範學校の様子については、次の研究が参考になる。  
Wen-tsin Yeh, *Provincial Passages: Culture, Space, and the Origins of Chinese Communism*, University of California Press, 1996, pp. 71-93
- (14) 楊賢江「論教育當注重實用」、『竹柔隨錄』『浙江省立第一師範校友會誌』第一號、一九二三年。
- (15) 楊賢江「學生自動之必要及其事業」、『學生雜誌』第二卷第五號、一九一九年五月五日。
- (16) 以上の習慣については、浙江省立第一師範學校二年生楊賢江「我之學校生活」、『學生雜誌』第二卷第八號、一九一五年八月五日、に詳しい。鄭振鐸「憶賢江」、『楊賢江紀念集』三五頁。
- (17) 楊賢江は生涯にわたり日記を付けていたようだが、大部分が抗日戦争で失われたようである。残存しているのは、一九一五年（一月一日、二月一七日、三月一六日、二四日、二六日が消失）と一九一八年分であり、『楊賢江全集』第四卷に収録されている。
- (18) たえば次のようなものである。「世衰道微人欲橫流、非剛毅之奚能立足」（朱熹の言動。日記、一九一五年六月二日）。「經驗爲才智之父、記憶爲才智之母」（イギリスのことわざ。日記、一九一八年一〇月一七日）。
- (19) こうした偉人や著名人への関心はそののちにも見られたものであり、そうした人物たちが、どのようにして世の評判を勝ち得たのかを紹介する文章を、『學生雜誌』に發表している。YK（楊賢江）「柯克思的成功談」、『學生雜誌』第八卷第五號、一九二一年六月五日（アメリカ民主黨の有力政治家、ジェイムズ・コックスに關する文章）。雁江（楊賢江）「羅斯福的青年時代」、『學生雜誌』第九卷第二號、一九二二年二月五日（セオドア・ローズヴェルトに關する文章）。雁江「愛迪生的青年時代」、『學生雜誌』第九卷第六號、一九二二年六月五日（エジソンに關する文章）。
- (20) 日記、一九一八年一二月二七日、『楊賢江全集』第四卷、三三三頁。讀んだ感想を、次の文章にまとめて發表もしている。楊賢江「讀曾文正公嘉言鈔感論」、『學生雜誌』第四卷第二號、一九一七年二月五日。なお、修養に有益であるとして、曾國藩の日記や家書に對し肯定的に言及することは、惲代英、楊昌濟、吳稚暉、黃尊三、宋教仁、胡適、

- 林伯渠、曾琦、謝覺哉らの日記にも見られるという。この点についての詳細は、後藤延子「渾代英の五四時期の思想——日記を中心に（一）」七一八頁。
- (22) 楊賢江「讀『自助論』」『學生雜誌』第四卷第一〇號、一九一七年一月五日。Self-Helpの翻譯は、清末に林萬里によりなされて商務印書館から刊行されており、民國時期にも刊行が續いていた。
- (23) 日記、一九一五年六月六日、『楊賢江全集』第四卷、七二七—七三三頁。
- (24) 以上の点については、浙江省立第一師範學校二年生楊賢江「我之學校生活」『學生雜誌』第二卷第八號、一九一五年八月五日、一八頁。
- (25) 浙江省立第一師範學校二年生楊賢江「我之學校生活」『學生雜誌』第二卷第八號、一九一五年八月五日。
- (26) 日記、一九一五年二月三日、『楊賢江全集』第四卷、五一—六頁。
- (27) 鄭振鐸「二位最好的先驅」『楊賢江紀念集』一一頁。
- (28) 楊賢江は彼の姿を見た人々が、その「讀書人」らしからぬ體軀に驚いていたという様子を記しており、その筆致はいささか得意げである。楊賢江「青年對於體育的自覺」『學生雜誌』第一〇卷第四號、一九二三年四月五日、二—三頁。
- (29) 蔣維喬（一八七三—一九五八年）は、清末以來、蔡元培らが上海に開設した愛國學社の女子部である愛國女學の校長を務めるなど教育事業への關與で知られる一方、商務印書館で教科書や『辭源』の編纂に取り組むなど出版事業でも活躍した人物である。蔣維喬の靜坐の提唱がどれほどの社會的影響を及ぼしたのかといった問題については、まだ十分な研究が存在しない。同時代の日本で流行していた岡田式靜坐法との關連も推測される。
- (30) 楊賢江「記與蔣竹莊先生之談話」『學生雜誌』第三卷第八號、一九一六年八月五日。
- (31) 日記、一九一五年二月二日、『楊賢江全集』第四卷、三一—四頁。
- (32) 日記、一九一五年五月九日、『楊賢江全集』第四卷、五二—五三頁。
- (33) 日記、一九一八年二月二九日、『楊賢江全集』第四卷、三三—三三頁。
- (34) 『學生雜誌』は創刊號から修養欄を設け、多くの取り組みを紹介している。
- (35) 田村逆水『成功と人格』博文館、一九〇七年、一五一—一五二頁。
- (36) 一例として、日記、一九一五年九月一六日、『楊賢江全集』第四卷、一三三—一三三頁。
- (37) のちに言及する商務印書館の編集者朱元善は、そうした欲求を販路の擴大に利用したという。茅盾『茅盾全集』第三四卷、人民文學出版社、一九九七年、一三七—一四六頁。
- (38) 以上の理由については、劉宗靈「民國初年的報刊與知識青年的人生樣態——以青年楊賢江爲例」『寧波大學學報（人文科學版）』第二五卷第六期、二〇一二年一月、の分析が參考になる。
- (39) 日記、一九一八年一月二〇日、『楊賢江全集』第四卷、二〇七—二〇八頁。楊賢江が書き寫したのは、次の内容である。「苦樂は客觀的なものではなく、主觀に從つて變動するものである。だから、ある事柄を苦に値するとし、ある事柄を樂に値するのは、道理としては通らないのである。天下に苦が多いのは、求めても得られないためである。求めても得られないというのは、求めるところが過大なのである。無用の衣服や飾り、無意味な虚榮は、本來得る必要もなく、また容易に得られないものである。それをどうしても得ようとするならば、苦しめないはずがない。だからこれらの苦は、すべて求める者が自らつかみ取ってしまったものなのだ。これは、渾代英「我之人生觀（續）」『光華學報』第二年第三期、一九一七年五月七日、を讀んで書き寫したもので、大意は異ならないが、原文とは字句の異同がある。この点については、後藤延子「渾代英の五四時期の思想——日記を中心に（二）」一八一—一九頁、にも説明がある。なお楊賢江と渾代英は、楊の『學生雜誌』編集を渾が、渾の『中國青年』編集を楊が助力

- するなど、そののちも交流を続けていった。
- (42) 以上の肇慶での経験は次の文章に基づく。楊賢江「愁城生活録（游粵雜記之一）」『少年中國』第二卷第一〇期、一九二〇年一月。
- (43) 以上の上海の状況の描寫は、江一「楊賢江」『環境與修養』『學生雜誌』第八卷第七號、一九二二年七月五日。
- (44) 楊賢江「生活與藝術」『學生雜誌』第八卷第三號、一九二二年三月五日。
- (45) 江一「環境與修養」。
- (46) 楊賢江「生活與藝術」。楊賢江が、ここでウイリアム・モリスに言及したのは、彼のそれまでの讀書傾向から考えると、かなり唐突な印象を受ける。おそらくは、同時期日本でのモリス紹介に觸發されたのではないかと推測される。日本では、明治末年より堺利彦がモリスの紹介に努めており、また一九二〇年には堺のみならず、室伏高信や河田嗣郎らにより、モリスの思想を解説する文章が發表されていた。堺利彦「藝術的社會主義者キリアム・モリス」『改造』一九二〇年六月號。室伏高信「モリスの藝術的社會主義」『ギルド社會主義の創生（二）』『批評』一九二〇年五月號。河田嗣郎「キリアム、モリスの文明觀と藝術觀と勞働觀」『經濟論叢（京都帝國大學經濟學會）』第一〇卷第一號、一九二〇年一月一日。河田の文章はその大部分が翻譯され、昔塵「莫里斯之藝術觀及勞働觀」『東方雜誌』第一七卷第七號、一九二〇年四月一〇日、として中國でも紹介されている。ただし、河田の文章の翻譯であることは言及されていない。
- (47) YK「現實生活裏的理想生活」『學生雜誌』第八卷第四期、一九二二年四月五日、六頁。
- (48) 楊賢江「文藝與人生」『學生雜誌』第八卷第八號、一九二二年八月五日。
- (49) 雁江「青年的藝術感」『學生雜誌』第八卷第六號、一九二二年六月五日。
- (50) 楊賢江「文藝與人生」九頁。
- (51) 雁江「青年的藝術感」。ターウインのこの後悔の念は、太玄（周太玄）「生物學大家達爾文自傳（續）」『學生雜誌』第四卷第七號、一九二二年七月五日、二四頁、に紹介されており、楊賢江もこの文章を利用したのである。
- (52) YK「病後」『民國日報』（上海）副刊『覺悟』一九二二年三月一五—二一日。
- (53) 楊賢江自身によると、とりわけガールフレンドの支えが重要だったようである。だが、妻とは別の女性との交際が、人間關係を複雑にしていた可能性も存在するだろう。なお、ゴシップの域を出ないが、楊賢江の女性關係が派手であったという評價もある。呂斯慶「楊賢江的生平」『社會新聞』第四卷第二二期、一九三三年九月六日。
- (54) 以上の描寫については、YK「病後」。
- (55) 茅盾「矛盾全集」第三四卷、一三七—一四六頁。
- (56) 北京大學の學生を中心とする「新潮」に發表された羅家倫「今日中國之雜誌界」（『新潮』第一卷第四號、一九一九年四月）において、「學生雜誌」は『東方雜誌』などほかの商務印書館の雜誌とともにその水準の低さを批判されている。この批判が、『學生雜誌』改革を促したようである。この點については、王飛仙「期刊、出版與社會文化變遷」九二—九四頁、を參照。
- (57) 以上の點については、王學・但昭彬「試析楊賢江的編輯思想與辦刊精神——兼論楊賢江對『學生雜誌』的改造與革新」『武漢科技大學學報（社會科學版）』第六卷第四期、二〇〇四年一月、に詳し。
- (58) 「通訊答問欄」のこのようなありようについては、王飛仙「期刊、出版與社會文化變遷」六二—六五頁。
- (59) 夏衍「回憶楊賢江同志」『楊賢江紀念集』六八頁。
- (60) 葉聖陶「楊賢江同志逝世五十周年紀念」『楊賢江紀念集』六三頁。正確な數を算出できないのは、「記者」という署名で書かれた返答が複

数存在し、それがすべて楊賢江の手になるものであるのが判然とし  
ないためである。ただし、内容から見て、おおむね楊賢江により執筆  
されたとは推測できる。

(61) 「答北洋女師附中黃蘭君女士」『學生雜誌』第一一巻第一二號、一九二  
四年一月五日。これは誤解であって、楊賢江は「われわれは元々男  
女のいかなる制限も設けていない。女性からの「通訊」「答問」およ  
び投稿などについては、男性と同様に對應しています」と返答してい  
る。とはいえ、女性讀者にこのような誤解を抱かせるほど、男性主體  
の雜誌と見られていたことがわかる。

(62) 「賢江致張綱之」『學生雜誌』第一〇巻第八號、一九二三年八月五日、  
三頁。

(63) 讀者が楊賢江を頼みとして一例として、次の投稿がある。「私は  
方角を見失った一隻の小舟のように、強風と荒波のなかで翻弄されて  
いるが、光り輝く灯臺を探し當てられずにいる。また、歩くことを習  
い始めたばかりの幼子のように、滑りやすく起伏のある道を歩んでい  
るが、慈愛に溢れた保母を見つけられずにいる。煩悶、痛苦、甘美と  
苦しみがないまぜになった氣持ちが、常に私にまとわりついているこ  
とが、この(いかなる)導きもないという状態を抜け出せない原因で  
ある。(しかし)あの日、あなた(楊賢江)が「以後、君に疑問があ  
れば、私があるの代わりにできる限り方法を考えよう」と話してく  
れて以降、私の屈折した内面は伸びやかに始めた。私は密かに  
思っている、「今後、私は私の勉學を求める心を阻む悪魔に、勝利を  
得させることがなくなった。私はいま、慈愛に満ちた保母を見つけた  
のだ」と。私の自學の期間、疑問に突き當つたときは、いつもあなた  
の手を煩わせることになろうかと思えます。今後の歩みについても、  
常にあなたの助言を仰ぎたく思います。煩悶し束縛を受けることを願  
わず受け入れもしない、暗闇のなかで摸索している一人の青年(であ  
る私)が、ここにいたってようやく、光明という道に向かって新しい

生命を創造することが可能となったのです」『葉工哲致楊賢江』『學  
生雜誌』第一〇巻第五號、一九二三年五月五日、二頁。

(64) 一例として次の投稿がある。「あなたと私の間で、今後(書信のやり  
とりを通じて)當時連絡を取り合い、討論と激勵をさせていただき、私  
の精神面の飢えと社交面での窮乏を埋めていただくようお願い申し上  
げます」『高崇福致賢江』『學生雜誌』第一〇巻第五號、一九二三年五  
月五日、六頁。

(65) 「徐廉如致『學生雜誌』」『學生雜誌』第一〇巻第七號、一九二三年七  
月五日、二頁。

(66) 「賢江致倪迪楨」『學生雜誌』第一一巻第八號、一九二四年八月五日、  
九九頁。

(67) 「江一致徐廉垣」『學生雜誌』第九巻第六號、一九二二年六月五日、九  
七―九八頁。

(68) 健夫(楊賢江)「個人心與社會心」『學生雜誌』第九巻第三號、一九二  
二年三月五日、六頁。

(69) 健夫「個人心與社會心」。  
YK「愛護學校與批評學校——養成守法的精神」『學生雜誌』第九巻  
第四號、一九二二年四月五日。

(71) 楊賢江「怎樣講修養」『學生雜誌』第一一巻第四號、一九二四年四月  
五日、四頁。

(72) 楊賢江「怎樣講修養」四―五頁。「獨善其身」は、『孟子』盡心上篇に、  
「窮則獨善其身、達則兼善天下」とあるのを踏まえた表現である。

(73) 楊賢江「怎樣講修養」五頁。

(74) 同、四頁。

(75) 「記者致曹子真」『學生雜誌』第一一巻第八號、一九二四年八月五日、  
九五頁。

(76) 日記、一九一八年五月二八日、『楊賢江全集』第四巻、六五―六六頁。  
日記、一九一八年五月二九日、『楊賢江全集』第四巻、六六―六七頁。

- (78) 「周繼福致楊賢江」「賢江致周繼福」「學生雜誌」第一卷第三號、一九二四年三月五日、一四一頁。
- (79) 「賢江致黃濟民」「學生雜誌」第二卷第八號、一九二四年八月五日、九六頁。
- (80) 楊賢江「勗自學者」「學生雜誌」第一〇卷第五號、一九二三年五月五日。
- (81) 楊賢江「再勗自學者」「學生雜誌」第一〇卷第七號、一九二三年七月五日、一一二頁。
- (82) 同、三頁。
- (83) ある讀者は、實際に次のような感想を述べている。「『學生雜誌』第一卷第三號「通訊欄」で、「無産者は學校に入學して勉強する必要はない」という文字を見て、私は本當にうれしかった。われわれ苦學生は今後深く悩む必要はなく、進學しようとしても進學できないという苦しみを解決する方法を得たのだ」「雲端致楊賢江」「學生雜誌」第一卷第八號、一九二四年八月五日、九六頁。
- (84) 「記者致王繼章等」「學生雜誌」第一卷第八號、一九二四年八月五日、九六頁。
- (85) 當時、このような意味で社會科學の學習が推奨されたことについては、次の業績も参照。王汎森「主義與學問・一九二〇年代中國思想界的分裂」許紀森主編「啓蒙的遺產與反思」江蘇人民出版社、二〇〇九年。
- (86) 「記者致姜敬輿」「賢江致尹誠」「學生雜誌」第一卷第八號、一九二四年八月五日、一三八―一四〇頁。
- (87) 「賢江致文方」「學生雜誌」第一卷第三號、一九二四年三月五日、一三七―一三八頁。
- (88) この點については、王汎森「煩悶の本質是什麼」一二五頁、を参照。陳獨秀の見解については、野村浩一「近代中國の思想世界——『新青年』の群像」岩波書店、一九九〇年、二九六―三三〇頁、蔡元培や胡適の見解については、拙稿「五四時期廢除考試運動考」石川禎浩編
- (89) 『現代中國文化の深層構造』京都大學人文科學研究所、二〇一五年、一一七―一二一頁、を参照。また、呂芳上『從學生運動到運動學生』一五五―一八七頁、も参考になる。
- (90) 楊賢江「教育者與政治」「教育雜誌」第一五卷第二號、一九二三年二月二〇日、二頁。
- (91) 楊賢江「學生與政治」「學生雜誌」第一〇卷第五號、一九二三年五月五日。なおこの文章は、「冒頭にまず説明しておきたい。學生は政治に關わるべきだと私は主張しているのだ」と、との一文から始まっている。
- (92) 楊賢江「再論學生與政治」「學生雜誌」第一〇卷第七號、一九二三年七月五日、六一―八頁。
- (93) 「於華寧致楊賢江」「賢江致於華寧」「學生雜誌」第一〇卷第一二號、一九二三年二月五日、一五頁。
- (94) 「呂品致楊賢江」「賢江致呂品」「學生雜誌」第一〇卷第八號、一九二三年八月五日、一一二頁。
- (95) 「姜敬輿致『學生雜誌』記者」「記者致姜敬輿」同上、一一―一二頁。
- (96) 「賢江致陳璋瑜」「學生雜誌」第一卷第三號、一九二四年三月五日、一―三頁。
- (97) 周繼福という投稿者は、自分と同様、苦學の境遇に立たされているほかの投稿者に大きな共感を寄せていた。「周繼福致楊賢江」「學生雜誌」第一卷第三號、一九二四年三月五日。周繼福が言及しているのは、「蕭若蘭致楊賢江」「學生雜誌」第一〇卷第一〇號、一九二三年一〇月五日、である。
- (98) たとえば、愛讀者と投稿者の寫眞を掲載してはどうかという提案は、よい提案だとして實行に移されている。「張名彥致『學生雜誌』記者」「記者致張水彥」「學生雜誌」第一〇卷第三號、一九二三年三月五日。また、性欲研究に關する論考を多く掲載して欲しいという要望も受け入れられている。「黃洱浙等致『學生雜誌』記者」「記者致黃洱浙等」

- (99) 『學生雜誌』第一〇卷第四號、一九二三年四月五日。  
 「答保定甲工螢光君」『學生雜誌』第一一卷第七號、一九二四年七月五日。
- (100) 「答山西稷山薛仙一君」『學生雜誌』第一一卷第七號、一九二四年七月五日。
- (101) 「樓建南致楊賢江」『學生雜誌』第一〇卷第一〇號、一九二三年一〇月五日、四一五頁。樓建南は後述のように、樓適夷である。
- (102) 「賢江致樓建南」『學生雜誌』第一〇卷第一〇號、一九二三年一〇月五日、四一五頁。
- (103) 楊賢江は次のような意見を表明している。「文學を愛好して、志がかえって消沈してしまうということは、おそらくよく見られる現象である。しかし我々が文學に希望するのは、決してこのようなことではない。我々は文學作品を通じて止めどない涙を流すばかりではなく、奮闘するという熱情をいつそうかき立てなければならぬ。文學が人間の罪惡を描寫すれば、我々はそれを洗い流す決心をしなければならぬ。文學が社會の腐敗を描寫すれば、我々はそれを掃り動かす文學のみが、現代青年の必要とする文學である。そのようであれば、我々を墮落させる、あるいは我々を消沈させる文學なのであって、我々はそれを排斥しなければならぬ」。「賢江致高冥飛」『學生雜誌』第一二卷第二號、一九二五年二月五日、一二五頁。
- (104) 「倪渭卿致『學生雜誌』記者」『賢江致倪渭卿』『學生雜誌』第一二卷第四號、一九二五年四月五日、一二二頁。
- (105) 同上。
- (106) 同上。
- (107) 日記からは、楊賢江が、曾國藩ら尊敬する人物に關する著述のほかに、『近思錄』や『明儒學案』などに目を通していたことがわかる。また、『大中華』、『中華學生界』、『教育雜誌』、『學生雜誌』、『英文雜誌』、『新民叢報』などの中國の雜誌、『太陽』や『實業之日本』などの日本の雜誌も読んでいた。
- (108) 楊賢江の變化は、マルクス主義の影響のしからしむるところであったのかもしれない。マルクス主義の下では、労働者の解放が最も優先されるべき事柄であり、藝術はそれに資する範圍で許容される。つまり、藝術の意義は二義的なものとして評價されがちである。この立場からすれば、楊賢江の變化ははなはだ當然のことであろう。ただし、マルクス主義に對する學習や理解が、楊賢江にせよほかの中國の知識人にせよ、當時はまだそこまで進んでいたとも考えにくい。變化のより本質的な要因は、やはり文藝や藝術に對する愛着が弱かったことにあるだろう。
- (109) 毛澤東が、靜坐が靜を重視して動をおろそかにしていると蔣維喬を名指ししつつ批判し、注目を浴びたことはよく知られている。二十八畫生（毛澤東）「體育之研究」『新青年』第三卷第二號、一九一七年四月一日。
- (110) キリスト教に對する態度の變化については、一九二〇年代初頭に盛り上がりを見せ、尊敬する友人憚代英も積極的に主導した反キリスト教運動が關係していたと考えてよいだろう。この運動については、石川禎浩「一九二〇年代中國における「信仰」のゆくえ——一九二二年の反キリスト教運動の意味するもの」狭間直樹編『一九二〇年代の中國』汲古書院、一九九五年、に詳しい。
- (111) 「賢江致周繼福」『學生雜誌』第一一卷第三號、一九二四年三月五日、一四一頁。
- (112) タージマハルがどの都市に位置しているのかといった、細かなレベルの質問にまで、楊賢江はしばしば返答している。江「答汕頭C.H.君」『學生雜誌』第一三卷第七號、一九二六年七月五日。
- (113) 華少峰（華崗）（一九〇三—一九七二年）は、浙江省出身。一九二五年に中國共產黨に入黨し、宣傳工作の分野で活躍、多數の著述を残し

た。一九五五年に胡風反黨集團の一員と認定されて以降、厳しい批判を受け過酷な獄中生活を餘儀なくされたまま死去した。

樓建南（樓適夷）（一九〇五—二〇〇一年）は、浙江省出身。多数の短編小説や散文を発表する一方、外國文學の翻譯にも積極的であった。中國左翼作家連盟、中國共產黨に参加して活動している。このほか、「通訊欄」に投稿した讀者のなかで、のちに著名となった人物として次の人々が挙げられる。

李翔悟（一九〇七—一九三五年）は、河南省出身。一九二五年に中國共產黨に入黨し、モスクワ留學を経て歸國後は、紅軍の幹部の一人として活動した。圍剿戰のさなかに命を落とした。

馮連山（一九〇六—一九六一年）は、廣東省出身。一九二六年中國共產黨入黨。廣東省で革命運動に従事した。

許金元（一九〇六—一九二七年）は、江蘇省出身。非キリスト教運動に参加。一九二五年、中國共產黨入黨。蔣介石による清黨により命を落とした。

王達強（王達祥）（一九〇二—一九二八年）は、湖北省出身。中華大學で學び、武漢にあって五三〇運動を指揮した。中國共產黨にも入黨している。一九二八年に中國國民黨により逮捕され、處刑された。このほかにも次の人物たちの名前が見える。

崔萬秋（一九〇三—一九八二年）は、山東省出身。日本留學を経て歸國後、上海の日刊紙『大晚報』の編集に参加したことで知られる。「通訊欄」に投稿するのみならず、楊賢江を直接訪ねてくれたようである（毛德傳「崔萬秋不是文化特務」「炎黃春秋」二〇一一年第七期、四四頁）。一九四九年以降は臺灣（中華民國）の外交官として活躍し、中華民國駐日大使館にも勤務した。

翁秀民（一九〇二—一九五一年）は、廣東省出身。黄埔軍官學校潮州分校を経て、北伐軍に参加。一九二八年以降、アメリカに渡りサンフランシスコにて『少年中國晨報』主編に就任。晩年は香港に移住し

て過ごした。

龍冠海（一九〇六—一九八三年）は、海南島出身。清華學堂を経てアメリカに留學し、歸國後は金陵女子大學で社會學を講じる。

(114)

楊賢江「教育者與政治」一頁。

同様の疑いは、失學者・苦學者との間のやりとりにも存在する。彼らの大半は當初、貧困などから學問ができない、あるいは上級の學校に進學できないことに悩み、『學生雜誌』に投書をしたのだが、それに對する返答は、前述したように、學校に行く必要はない、社會科學を學習せよ、革命に参加せよ、といったものだった。こうした答えに満足した者ももちろん多かっただろうが、満足できなかった者もまた少なからず存在したのではないかと思われる。しかし、『學生雜誌』に現れるのは、満足した者との間のやりとりのみであり、満足できなかった者からの問いかけは見られない。こうした問いかけは事實上隠蔽されたか、あるいは問いかけをしても無駄であるということ、讀者の側が自發的に取り下げた可能性があるのではないかと想像される。

(116)

記者「答蕪湖萃文書院葉軼凡君」「學生雜誌」第一卷第八號、一九二四年八月五日、八五頁。また次の見解も参考になる。「人生の二大要求は、食と性であり、兩者は同様に重要である。一方では食事をしないわけにはいかないし、一方では求愛しないわけにはいかない。しかし現存の經濟制度の下では、戀愛は完全に經濟の支配を受けており、こうした資本主義組織の社會では、すべてが商品化され、人も商品に變化し、金錢を用いて價値を計算できるようになっている」「だから戀愛を講じるのであれば、現在の社會の經濟制度を根本的に改革しなければならぬ」。楊賢江「青年問題」「覺悟」一九二五年一月二七日—三一日。

(117)

郁達夫の試みについては、大東和重「郁達夫と大正文學——自己表現」から「自己實現」の時代へ」東京大學出版會、二〇一二年、周作人の試みについては、伊藤徳也「生活の藝術」と周作人——中國の

- (118) デカダンスⅡモダニティ』勉強出版、二〇一二年。  
朱謙之と廢除考試運動の關わりについては、拙稿「五四時期廢除考試運動考」を参照。また彼の當時の思想を分析した業績として、海青『自殺時代』的來臨?——二十世紀早期中國知識群體的激烈行爲和價值選擇』中國人民大學出版社、二〇一〇年、二〇一—二四三頁、を参照。
- (119) この過激さは、朱謙之自身においても持續し得るものではなく、彼はこのち佛教に救いを求めて出家したのち、それにも飽き足らず、國民革命の熱心な贊同者として再び立ち現れることになる。なお、朱謙之ほど過激ではないにせよ、國家や政治の意義を否定的に捉えるアナキズムが、五四時期の中國で吸引力を有したことが知られている(この點については、次の業績に詳し)。Art Dirlík, *Anarchism in the Chinese Revolution*, University of California Press, 1991。ただし、楊賢江自身はアナキズムに引きつけられることはほとんどないままに、政治への關與や中國の命運について語るようになり、事實上アナキズムと決別している。そして、こうした個性をもつ人物が率いる『學生雜誌』にも、アナキズムが容喙する餘地はほとんどなかったように思われる。
- (120) もちろん、社會や國家の現状の不滿をもち、その改善に參與しようとする青年たちのなかでということである。たとえば、新文化運動に積極的に參與した學生は二割にすぎず、残りの八割は程度の差はあれ贅澤で退廢的な生活をおくっていたとされる。また、特に北京大學の學生に關しては、進歩的で政治運動を組織する者、道樂者、勉強熱心だがそれ以外のことには關わらない者という三つの類型に區分でき、だ
- れもがみな政治的・社會的運動に熱心だったわけではないという指摘もなされている。この點については、拙稿「五四時期廢除考試運動考」二二—二四頁。社會や國家の問題に關心をもたない青年にとつては、楊賢江の議論もまた緣遠いものであったことだろう。
- (121) 一例として、吳黎平「我的良師益友代英同志」『回憶惲代英』人民出版社、一九八二年。
- (122) 但一「惲代英」『煩惱的救濟』『中國青年』第七三期、一九二五年四月四日。代英「惲代英」『馬克思主義者與戀愛問題』『中國青年』第八二期、一九二五年七月一八日
- (123) F. M. 「惲代英」『糾正對於馬克思學說的一種誤解』『中國青年』第六七期、一九二五年二月二日。
- (124) ただし、『教育史ABC』『新教育大綱』『青年期的心理與教育』は李浩吾、『世界史綱』は柳島生、『家族、私有財產及國家之起源』は李膺揚と、いずれも別名で刊行している。
- (125) 楊賢江が否定した、「藝術的生活化」の意義を肯定的に議論する論說すらも掲載されている。朱介民「藝術的生活論」『學生雜誌』第一八卷第一一號、一九三一年一月一〇日。
- (126) この點については、王汎森「煩悶の本質是什麼」、の議論が參考になる。
- (127) たとえば、本稿冒頭で挙げた林德揚の自殺を論じる際、李大釗は藤村操の自殺に言及しており、日本の煩悶青年の問題を明らかに意識していた。守常「李大釗」『青年厭世自殺問題』『新潮』第二卷第二號、一九一九年二月一日。